

平成 29 年度 I D E 東北支部 I D E 大学セミナー／
第 27 回東北大学高等教育フォーラム 報告書

平成 29 年度 I D E 大学セミナー 大学生と言語 —変容する思索と文化の礎—

平成 29 年 11 月 29 日

I D E 大 学 協 会 東 北 支 部
東北大学高度教養教育・学生支援機構

目 次

平成29年度 IDE 大学セミナーの概要	1
平成29年度 IDE 大学セミナー プログラム	2
開 講 式 IDE 大学協会東北支部長挨拶	3
里見 進 東北大学総長	
セミナー趣旨説明	5
米澤 彰純 東北大学インスティテューショナル・リサーチ室長／教授	
基調講演 「脳科学から見た現代の大学生と言語」(要約)	7
酒井 邦嘉 東京大学大学院総合文化研究科教授	
講演1 「大学教育の英語化と留学・アイデンティティ・相互理解」	8
嶋内 佐絵 早稲田大学アジア太平洋研究センター助手	
講演2 「国語教育が育てる大学生の言葉の力」	26
島田 康行 筑波大学人文社会系教授／アドミッションセンター長	
講演3 「アカデミック・ライティング指導／支援から見る、大学生の言葉と思考」	45
佐渡島 紗織 早稲田大学国際学術院教授	
討 議	69
閉 講 式 閉講挨拶	83
花輪 公雄 東北大学理事／高度教養教育・学生支援機構長	
アンケート・参加者統計	85

平成29年度 IDE 大学セミナーの概要

1. 主 催：

IDE 大学協会東北支部，東北大学高度教養教育・学生支援機構

2. 本年度のテーマ：

大学生と言語－変容する思索と文化の礎－

3. 趣 旨：

大学教育における言語の重要性は，改めて指摘する必要はないでしょう。日本語，英語をはじめとする外国語など言語の力は，大学入学時，大学教育のプロセス，そして就職活動および卒業後のキャリア形成においても，必ず問われる重要な要素です。言語は，コミュニケーションの手段であるにとどまらず，人間の思考や情動と切り離し難い本質を持っており，大学生が自らの視野を形作り，広げていく思索と文化の礎としても重要な役割を果たします。

言語に関わる領域での学力測定の在り方も，教育の本質に関わる形で大きく問われています。入試改革の目玉として，大学入試センターの新テストにおける記述式問題の導入，英語の多技能を評価するために民間の資格・検定試験の知見の積極的活用が掲げられています。また，大学教育では，外国語の能力向上のエビデンスを測定しようとする動きも広がっています。さらに，ライティングやプレゼンテーションを含む言語コミュニケーション技能の育成や異文化理解など，日本語・外国語双方について，教育・学習の理論のみならず実践面においても変化が加速しています。

他方，大学生の言語環境は，大きな変化に直面しています。高校生の半数以上が1か月1冊も本を読まず（文部科学省委託調査），大学生は半数近くが1日の読書時間0なのに対し，スマートフォンはほぼ全員が使用，平均利用時間も2時間40分であり，授業以外の勉強52.8分，読書時間の24.4分を遥かに上回ります（第52回全国大学学生生活実態調査）。デジタルメディアやAIの発達が，学生の言語使用の実態に影響を与え，高等教育の在り方，ひいては人間と言語との関係にまで課題を投げかけているともいえます。

AIが会話し，翻訳し，文章を書き，分析・診断を行う時代に，デジタルネイティブの学生たちは言語をどのように操り，学んでいくことになるのでしょうか。人類の文明と社会を支えてきた言語の普遍的な機能を踏まえた上で，大学の果たすべき役割について議論を深める必要があります。本セミナーは，大学生と言語という視点から，大学教育の将来像をみつめようという企画です。

4. 日 時：

平成29年11月29日（水）13：00～

5. 会 場：

仙台ガーデンパレス 2階「鳳凰」

〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡四丁目1-5

電話022（299）6211

平成29年度 IDE 大学セミナー プログラム

時間	プログラム	司会者
13 : 00	開講式 IDE 大学協会東北支部長挨拶 里見 進 東北大学総長	東北大学 大森 不二雄
13 : 05	セミナー趣旨説明 米澤 彰純 東北大学インスティテューショナル・リサーチ室長／教授	
13 : 15	基調講演 「脳科学から見た現代の大学生と言語」 酒井 邦嘉 東京大学大学院総合文化研究科教授	宮城大学 蒔苗 耕司
14 : 05	講演 1 「大学教育の英語化と留学・アイデンティティ・相互理解」 嶋内 佐絵 早稲田大学アジア太平洋研究センター助手	仙台白百合女子大学 槇石 多希子
14 : 40	休 憩	
14 : 50	講演 2 「国語教育が育てる大学生の言葉の力」 島田 康行 筑波大学人文社会系教授／アドミッションセンター長	東北大学 関内 隆
15 : 25	講演 3 「アカデミック・ライティング指導／ 支援から見る、大学生の言葉と思考」 佐渡島 紗織 早稲田大学国際学術院教授	東北大学 杉本 和弘
16 : 00	休 憩	
16 : 10	討 議	東北学院大学 齋藤 誠 東北大学 安藤 晃
17 : 15	閉 講 式 閉会挨拶 花輪 公雄 東北大学理事／高度教養教育・学生支援機構長	東北大学 大森 不二雄

開 講 式

開講挨拶

IDE 大学協会東北支部長

里見 進 東北大学総長

ご紹介いただきました東北大学総長の里見であります。IDE 大学協会東北支部長を務めております。開講にあたりまして一言ごあいさつを申し上げます。開講に当たりまして一言ごあいさつを申し上げます。

これは、私から言うまでもないことですが、この IDE 大学協会というのは、我が国の高等教育の充実と発展に貢献をするために作られました、民間の団体であります。大学や企業、ジャーナリズム、また政策関係者が広く集まりまして、活発な活動を行って参りました。大学・高等教育に対する社会の期待が、今一層高まっております。この IDE 大学協会の果たす役割というものも、これからますます重要になるというふうに考えています。現在、東北支部の会員としましては、機関会員が16名、また個人会員が57名おります。今日は多分、その大半の皆さま方がここにお集まりなのではないかというふうに考えています。さらに多くの皆さま方が、参加くださいますように、ぜひ呼びかけをよろしくお願いいたします。



この東北地区のセミナーは、2004年から始まっておりまして、今年で14回目を数えます。東北大学の高度教養教育・学生支援機構と共催という形を取っております。東北地区の大学現場の教育課題を意識しながら、大学教育とは何かということを考える。そういう本質的なセミナーにしたいという形で、これまで運営されてきたと考えています。私はこれで多分6回目の参加をこの会にはしていると思いますが、毎回実行委員の先生方が、適切なテーマを選んでくださいますので、私としては主催者として参加するよりは、むしろ参加者の一人として、非常に色々な意味で考えさせられ、また勉強したような会だと思っております。

今回は「大学生と言語」というものを主題に掲げております。また、副題に「変容する思索と文化の礎」と付けましたように、ここでは言語を単に大学生が身に付けるべき知能や技能として考えるのではなくて、あらゆる大学の教育研究、社会貢献活動と、そこから出てくるような思想や文化を考える上で、その基盤として欠かせないものというように捉えて、これから色々な講演をお聞きしたいと考えております。東北地方では、『遠野物語』を著しました民俗学者の柳田國男や、それからオリジナリティの高い童話を創作した宮沢賢治などが、地域の伝統、文化に立脚しながら普遍性のある思索と文化を産み出して来ております。また近年の大学の動きとしては、全ての授業を英語で行い、全ての学生に留学を課しているような、そして、世界中から多くの交換留学生を受け入れている国際教養大学の活動があります。それから教員の4割を国外から集めて、国際色豊かなコンピュータ技術や、研究者の育成を行う会津大学等、各大学がユニークな取り組みを始めております。

ただ、大学をめぐる様々な環境というのは、今急激に変化をしております。その中でも特に入

試の問題というのは、そのあり様を含めまして、差し迫った課題になっております。具体的にお話しをいたしますと、3年後の2020年度からは大学入学共通テストのあり方が、大きく変更されます。ご承知のように、英語については読む、聞く、話す、書くの4つの技能を総合的に測定する取り組みが進められており、この4技能を測定する観点から、大学入試センターのテストに加えて、民間の資格や検定試験が活用される方向で、準備が進められております。また、国語や数学においても、論理的な思考力や判断力、表現力等を育む教育の多様化に対応するために、記述式の問題が出題されることになっています。この入試改革で、このような素養を身に付けさせるという方向性は、まず間違っていないと私自身は思っております。けれども、それを達成する手段として、このような入試改革が正しいものであるかどうかは、これから一層検証していく必要があるのではないかと考えています。

本日は、大学教育と言語というテーマに関連いたしまして、脳科学や高校教育、国際教育、またライティングといった幅広い観点からの先端的な専門家の先生にご登壇いただき、講演をしていただくことになりました。大学生を見てみますと、スマートフォンに代表される、電子メディアの急速な普及があります。また、言語におきましても瞬時の自動翻訳が現実になりつつある。その一方で、大学生の半数がほとんど読書をしなくなっているというようなこと等、我々の時代と違って、大学生の置かれている言語環境というのは、大きく変化をしております。その変化にどういうふうに対応していくかというのは、これからの大きな問題だと思います。次世代の思索と文化を支えるための、海図をどうすれば描けるのかということは、現世代の英知を結集する大学の大きな役割だというふうに考えています。ぜひ、今回せっかくこういう題材でテーマを選んで議論をいただきますので、フロアを含めました活発なご議論を、主催者としてはお願いしたいというふうに考えております。

もう一度、ご多忙の中おいでいただきました講師の先生方に、また、参加者の方々には厚く御礼を申し上げます。本日のセミナーが、実り豊かな成果を上げますように、活発な議論を期待いたしまして、私のあいさつといたします。本日は本当に多くの皆様にお集まりいただきまして、ありがとうございました。

セミナー趣旨説明

東北大学インスティテューショナル・リサーチ室長

米澤 彰純 教授

初めに趣旨説明をさせていただきます。今回のテーマは、「大学生と言語」です。写真を2枚、用意させていただきました。ひとつめの写真は、1911年にできた東北大学の旧附属図書館の写真です。同図書館は、おそらく日本で3番目に古い大学図書館であり、東北地方では初めての大学図書館ということになると思いますが、今と雰囲気は変わった部分もありますし、変わっていない部分もあると思います。もうひとつの写真は、今年2017年に新しくオープンした東北大学青葉山新キャンパスの、青葉山コモンズという施設です。これは図書館、それからラーニングスペース、それからカフェテリアみたいな歓談スペースが入った複合施設になります。いわゆる図書館と呼ばれる建物の中で行われる活動は昔とは大分違って、今は普通にこのような形で学生たちが集まって、アクティブに学習することが流行っておりますし、だんだん定着もしてきていると思います。



図書館には色々な役割があり、東北大学の図書館には漱石文庫というものがあります。これは、夏目漱石が実際に読んで使った、大体500冊ぐらいの文献とノートのコレクションです。このノートを解析することで、漱石がどのように思索を行い、また作品を作り出していったのかをトレースすることができます。このような、古いものも含めた歴史的な文書を貯めていくというのが、ひとつ大きな役割として図書館にはあるわけですが、同時に現在の主流の学術情報は急速にオンライン化されているのも事実です。ここで非常に大きな問題として、オンライン化の一方で、世界的な出版社の寡占の中で、電子ジャーナルの価格が高騰しています。この図が示しているのは国立大学の調査ですが、国立大学の半分ぐらいで、現在大学の構成員に対して必要な学術情報が提供できていないことが示されています。

趣旨説明文にすでに書いたことですが、ふたつほど、データを示させていただきたいと思います。ひとつは文部科学省が行った高校生の読書に関する調査です。現在の高校生は、先ほどの里見進東北大学総長の話にもありましたが、約半数の学生が全く読書をしていないと答えています。その一方で、テレビ、インターネット、SNSという電子的な情報媒体に関しては、ゼロという回答は少ないわけです。ここからは、紙のメディアが電子的なメディアに置き換わった姿が浮かびあがります。

一番ショックなのは、図の真ん中の辺りです。これは、読書をしている人、していない人の割合がその他の活動とどういう関連があるかというのを見たものです。この真ん中は、SNSや電子メールなどで発信をしている人たちの、その発信に使っている使用時間と読書との関係が分かるわけですが、これを見ると逆相関になっております。すなわち、おそらく文字を使っているとは思いますが、SNSとかで発信されている方ほど、読書時間が短い。あるいはしていない割合が高いという結果になっています。

次に、大学生協が毎年行っている調査の中で、大学生の1日の読書時間を尋ねています。細かく見てみるとあまり安定していないのですが、ひとつだけ言えることは、ここ5年間、ほぼ一貫して読書時間、読書冊数が0の方が急速に増えていることで、やはり我々が大きな転換期に遭遇していることが分かります。

実行委員会の内部でも議論をしたのですが、現状を肯定的にとらえるか、否定的に捉えるかは、人によって、あるいは世代によって大きく見解が分かれました。この、例えば読書時間が短くなるということは、非常に危機的な状態であると考える委員の方もいらっしゃいました。一方で、私自身は割と optimistic なかもしれませんが、機械翻訳の技術がここ数年間で高まり、例えば韓国の友だちに韓国語でメールを打つということが可能になる一歩手前まで来ているようなことは積極的に評価しても良い気がします。

対話というところまでは行かないかもしれませんが、例えば静岡大学で今行われている実験は、ロボットの Pepper くんに、先生に成り代わって流ちょうな英語や中国語で授業をしてくれて、これをビデオに撮って、それで授業の録画教材を作るというようなことが、実際に行われ始めています。例えていえば、人間が歩いて色々なところに行っていたものが、自動運転を半分くらいできるような自動車に乗って移動するようになったというようなことが、言葉の世界で最近20年ぐらいの間に起きているのではないかと考えております。

以上の問題について、どうアプローチするかですが、まず、基調講演で酒井先生にお願いしたのは、科学的にこの問題を考えていただくということです。これが、我々のアプローチの基調になります。同時にこれを、3つの次元、すなわち国際的な次元、これは嶋内先生に、特に英語での大学での授業とはどういう意味を持つのかということからアプローチいただければと考えています。その次の우리나라（ウリナラ）は、「我が国」という意味ですが、島田先生には高校教育を通じて、国として、あるいは教育システムとしてこの問題をどういうふうに考えるかをお話いただければと考えています。最後に個人ですが、これを佐渡島先生の方から、学生一人ひとりが今、どういう形で言語の問題に向き合っているのか、あるいは先生方は、これに対してどのような支援をされているのかをお話いただければと考えております。

以上が趣旨説明になります。先生方、フロアの皆様の間で活発なご議論をお願いいたします。どうもありがとうございました。

講演

基調講演「脳科学から見た現代の大学生と言語」(要約)

東京大学大学院総合文化研究科

酒井 邦嘉 教授

大学生と言語との関わりは、現代の試金石として捉えることができる問題である。例えば、私は電子書籍と紙の書籍との比較を論じた本を著したが、電子書籍やインターネットは、検索や情報のリンクなどにおいては優れた点があるものの、逆に考える前にすぐ検索してしまう傾向を生み出す。思索を促す、また記憶を定着させるという観点からは、本のデザインからページ割りに至るまで注意深く計算して製作され、想起の手がかりの豊富な紙の書籍を、電子書籍が代替できるものではない。手書きのノートもまた、咀嚼しながら要点をまとめるという点において、受動的にメモをとりがちなパソコン入力よりも効果があることが実証されている。AIによる対話も翻訳も、現状は文法構造すらAIが理解できていない水準にとどまっているため、大学生がAIに頼るのは現状で危険である。

我々のグループは人間の脳の言語野が言語に果たす役割を研究し、文法を司る領域や文章を理解する領域、単語や音韻を司る領域などを特定してきた。そのなかで、人間の脳はもともと多言語に対応できる力をもっていること、外国語の熟達によって脳が活性化するのではなく、熟達するほど脳の活動を省力化できること、文



字による学習は二次的であって音声や手話にこそ言語の本質があることなどが科学的に解明されてきている。

人間は生涯にわたって読書や学習を続ける中で、自らの脳を作っていくことになる。したがって、特に大学生にとっては言語力と想像力の両輪によって創造力を高めていくことが大切であり、それは決して効率を重視して達成されるものではない。プリンシプルとしては "Be natural", すなわち、脳にとってできる限り自然な方法を選択し、一人ひとりがアンテナを広く向けながら自分で問題を発見するように促すことが、大学教育の役割だと考える。

講演 1 大学教育の英語化と留学・アイデンティティ・相互理解

早稲田大学アジア太平洋研究センター

嶋内 佐絵 助手

司会者 横石 多希子 教授

(仙台白百合女子大学人間学部長)

ご紹介いただきました横石でございます。ただ今の基調講演をふまえて、今度のご講演 1 は、嶋内佐絵先生によります、「大学教育の英語化と留学・アイデンティティ・相互理解」という演題でございます。嶋内先生のご略歴をご紹介いたします。6 ページをお開きください。先生は、早稲田大学の第一文学部から、早稲田大学のアジア太平洋研究科に進学されまして、そこで博士号を取得されました。今日のご講演にも関わることと思われそうですが、ソウル大学や、ハワイ大学で研鑽を積まれて、ご業績の主著書とされている、『東アジアにおける留学生移動のパラダイム転換－大学国際化と「英語プログラム」の日韓比較』に結実され、昨年出版されました。という方でございます。今日のご講演は、私どもの大学等が関わる課題に非常につながるアップデートな話題だと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。



横石 多希子 教授



嶋内 佐絵 助手

嶋内 佐絵 助手

ありがとうございます。ご紹介いただきました、早稲田大学アジア太平洋研究センターの嶋内佐絵と申します。本日はこのような機会をいただきまして、大変光栄に思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

私の本日の発表は、ふたつの点について主にお話しできればと思います。ひとつ目は、今回のセミナー趣旨にもありましたように、思索と文化の礎としての言語という側面に主に焦点を当てて、大学教育の英語化と留学、アイデンティティ、それから相互理解との関連についてお話ししたいと思います。

これは、今ご紹介いただきました、私が博士論文を書いていた時の研究で、日本と韓国の英語による学位プログラムに関する比較研究を行ったんですけれども、その分析結果をベースにお話しできればと思います。

もうひとつは、大学における英語化が、教育や学習において、どのような変化や課題をもたらしたのかということ、それからその英語化の正と負の側面についても最後にお話しできればと思っております。

大学教育の英語化とは

まず、大学の英語化とは一体何かということなんですけれども、これは簡単に言うと、EMI, English-medium Instruction のことです。非英語圏等におきまして、英語を教授媒介言語とした授業で、教えるものが英語そのものではなくて、専門科目、専門分野のコンテンツを教えるものをEMIと呼んでおります。今特に、英語教育の世界ではCLILという内容言語統合学習が流行っているんですけれども、これよりもより、コンテンツの内容に注目したものが、このEMIになります。

スライドの一番上に、English-taught Programsと書いたんですけれども、これが欧州におきまして、特に拡大しております。欧州においては、長い英語によるプログラムの歴史があるのですが、2002年に700余りだったのが、2014年には、もう8,000以上のプログラムが展開されているということです。それでは欧州において、このETPsが一番多く展開している国はどこだと思われますでしょうか。これは実は、オランダなんです。オランダ、ドイツ、スウェーデンという、これらの国が非常に精力的に展開しています。

日本においては、これはETPsと呼んでもいいんですが、あえてEnglish-medium Degree Programと申し上げています。なぜかという、日本において英語で授業を行っているかどうかという点で言いますと、英語で授業を行っている大学は、全大学の中で4割以上あるんですね。これは去年の文科省のデータです。4割以上の大学が英語で授業を行っているんですが、英語のみで学位を取得できるプログラムという、たったの3%しかないのです。なので、ここではあえてDegreeという言葉を入れて、明確にしています。どのくらいあるかというと、学部で24大学48学部、大学院レベルで88大学208研究科が展開されています。特に学部レベルでは私立大学を中心に、大学院レベルでは国立大学を中心に、このような英語によるプログ

ラムが展開しています。

大学の英語化の背景

大学の英語化の背景は、国内的要因と国際的要因に分けて考えています。国内的要因はご存知の、例えばスーパーグローバル大学創成支援事業やその前にあったGlobal 30のような国家政策と重点的な支援、それからグローバル人材の要請が特に、経済界からあるということですね。そして、少子化による大学入学人口の縮小、家庭の経済力の低下などもあるかなと思います。その中で国内の留学先として、国内でも国際的な経験をできる、英語で学ぶことができるということで、EMDP, English-medium Degree Programが選ばれている。

それから、先ほど酒井先生のご講演にもありましたけれども、日本語は非常に難易度の高い言語のひとつでもありますので、先ほど2,200時間とありましたが、アカデミックな分野で、日本語で研究を行うとなると、やはり2,200時間、もしくはそれ以上の時間が必要になるのかなと思います。ということで学術言語としての日本語が、言語的障壁になっているということです。その克服の手段として、EMDPが選ばれているということです。

次に国際的要因なんですけれども、世界共通語としての英語という点にはあまり異議を挟む方はいらっしゃらないと思うんですが、特にアジア地域においてこれが言えるのかな？と思います。欧州においては、例えばEUなどは加盟国の全ての公用語をEUの公用語にしようというような取り組みがなされていて、複言語主義という考え方も非常に発展していますけれども、アジアにおいては、ヨーロッパよりも格段に言語の多様性が高いんですね。ヨーロッパだと、全部の少数民族の言葉も入れて60とか70ぐらいの言語数なんですけれども、アジアにおいては、それは4,000とか5,000とか、そういうレベルの言語数になってきますので、その中でアジアという地域を考えても共通語としての英語の

地位は、ゆるぎないのではないかなと思います。

世界的な留学生の獲得競争というのもありまして、留学生というと、特に若い学生、学部生なんかを想像される方も多いかと思いますが、この間聞いた話では、ベトナムの有名大学が、教員の約1割を留学に送っているそうです。なぜかという、最近の大学、ベトナムのような発展途上国の大学においては、博士号を取ることが至上命題になっていて、海外に博士号を取らせるために留学に送っているわけです。その中で日本が第2位の留学先なんだそうです。なぜかという、同じアジア内で、英語で学位を取れるということで、日本が有名になっているそうなんです。ということでソフトパワー外交的な面で見ても、頭脳獲得という点で、英語化というのが非常に重要になって来るとは思いませんか。

また、世界大学ランキングのような世界標準化された指標の中でも、国際的な指標、たとえば外国人留学生数、外国人教員数であるとか、主に英語で出版されている論文数、論文引用数と言ったものも非常に重要になっています。Publish 'in English' or perish という言葉は、Publish or perish はよく言われていると思うんですが、ここに in English が入って、英語で出版しなければ滅びるという言い方すらあります。

これらの状況を、例えば Altbach や Phillipson なんかは、Academic imperialism とか、linguistic imperialism と言って、帝国主義であるというように悲観的な言い方で表現をしています。

こちらが、世界大学ランキングなんです。2011年と2017年のものですね。ふたつ注目していただきたい点がありまして、ひとつは丸になっているところですが、Top 200の半分以上は英語圏の国です。116校ですね。また、先ほど English-taught Programs というのが欧州で発展しているということで、特に積極的に導入しているのがオランダ、それからドイツ、スウェーデンというお話をしたと思うんですけれど、

それらの国々がランキングにおけるプレゼンスを上げているという背景があります。これはもちろん英語化と大学ランキングが単純に相関しているという話ではないんですけども、ただこの英語化というものが、何かしらの示唆を与えているのではないかなと私は考えています。

英語の価値とは？

英語の価値という部分について考えてみたいんですが、この本は今年の夏に出た、『これからの英語教育の話をしよう』という、応用言語学や社会言語学の先生方が書いた本の、巻末の座談会に参加させていただいて、その時にお話ししたことなんですけれども、日本においては言語そのものに対するリスペクトの低さがあります。低さというふうに言ってしまったんですが、さらに言うと非常に複雑なリスペクト構造を持っているのではないかなというふうに思います。

例えば、特に英語のネイティブ教員とかネイティブ話者に対する無条件のリスペクトのようなものがある一方で、例えば今度東京オリンピックをやる時に、じゃあ通訳はボランティアにしようといったような、言語使用そのものをひどく軽視するような風潮が一方であったりします。あとは日本語教育に関しても日本語教師なんて、誰でもできるだろうというような風潮があったりと、リスペクトがあるのかないのかよく分からないという状況です。

大学生はハイパー・グローバルリストというのは、私が非常勤で教える大学においてもそうなんです。大学生はグローバル化というものをかなり肯定的、無批判的に捉えていて、今はグローバル化だから英語が重要だっていうことを前提として頭にインストールしてしまっているんですね。なので、グローバル化とか英語化というものに対して、あまり批判的な視点を持っていないという面があると思います。

ボトムアップの帝国主義というのは、先ほど

言語帝国主義という話があったと思うんですけれども、こういった状況がどこから起こっているかという話です。実はエリート層ではなくてボトムアップ、つまりエリート層ではないところから起こっているのではないか。いわゆる国際英語、English as a Lingua Francaのような、英語に対する比較的フェアな見方というのは、エリート大学において割と通用しているのですが、英語で授業というよりは、英語教育そのものに時間を割いているような、マスの大衆化的な大学において、は、ネイティブ信仰にもつながるような、英語教育における言語帝国主義的な状況があると思います。

最後の英語への姿勢の二極化というのは、右に書いてある図ともちょっと関連しているんですけれども、AIの発達やgoogle翻訳、自動音声通訳といったものがこれからどんどん発展していくのではないかと思います。酒井先生のご発表で、まだまだそのgoogle翻訳の質が低いというお話があったと思うんですけれども、恐らくこれは日進月歩で改良されていくものではないかなと思っています。その中でコミュニケーションそのものであったり、通訳とか翻訳といった英語のスキルの部分というものの価値が、どんどん下がっていくのではないかと懸念しています。懸念というか、そうなるのではないかなと予想をしています。

一方で、このセミナー趣旨にもありました、思索の礎としての言語とか、異文化理解とか、相互理解とか、人間と言語というふたつが組み合わせさったからこそできる「言語の価値」というのも、ここでは英語に限って言いますが、そういった意味での英語の価値というものが、非常に重要になってくるのではないかなと思っています。

学生移動

ここからは、タイトルにもありました、教育の英語化と、学生移動と留学動機、アイデンティティ、それから相互理解というスライドに

それぞれ入っていきたいと思います。

まず学生移動に関してなんですが、ここ10年ぐらいの間に、日本においても留学生が急増しています。前年比で15%増、10年前からは約2倍です。同時にもたらされているのが留学生の多様化で、これは日本語による教育では受け入れられなかった層を獲得しているという意味で、留学生の多様化が起こっています。そしてもうひとつ、ここで強調しておきたいのが留学生移動の地域化という状況です。

右の方にある図は、ちょっとデータが古いんですけれども、今から20年前の時点から10年ほど前までの変化を表したものです。狭義の東アジア、ASEAN+3という枠組みの中で、どのぐらい留学生が増えているかを図式にしたものなんですけれども、括弧の中に増加率が入れているので、もしお時間があれば後で見ていただければと思うんですが、域内留学数が増えていて、留学生全体の93%はアジア諸国からの留学生なんですね。ということで、EMI、日本における英語化の教育の最大の受け手というのは、アジア諸国からの留学生というのが現状になっています。

留学動機の複雑化・多層化

次に、留学動機の複雑化・多層化ということなんですけれども、これは日本と韓国の英語による学位プログラムで東アジア諸国からの入学者を対象に行ったインタビュー調査から分析した結果です。国の枠組みによるプッシュ・プル要因というのは、先行研究で明らかにされているのですが、私の研究が明らかにしたのは、リージョナルなプル要因というのがあるのではないかなということです。プル要因というのは引っ張るという意味なので、あるひとつの国から、特定の国へ引っ張っていく、惹き付ける要因のことを指しています。つまり地域的な引き付け要因があるのではないかなということです。ここでは日本という国が、留学動機のひとつの決め手になっているのではなくて、英語で勉強

ができる地域としてのアジア圏、という要因があるということを表しています。

もうひとつ、真ん中のふたつが新しい発見なんですけれども、セカンドチャンス型とステップングストーン型というのがあります。セカンドチャンス型というのは、経済的負担や、英語力や学力が不足していて、英語圏、ここでは主に米国を指すんですけれども、米国等に留学できないから、英語で勉強できるアジア圏を選ぶという形の動機です。またステップングストーン型というのは、修士号や博士号など、将来的な学位は英語圏で取るけれどもその前のひとつのステップとして、日韓の英語プログラムを選ぶといったような留学動機というのが見られることが分かりました。

英語とアイデンティティ

次に、英語とアイデンティティに関してですが、右上の方に書かれていますが、地域統合論の中で、Adler & Barnett という人たちが、人的な相互交流や知的エリートたちの国際移動による地域内コミュニケーションの活性化が、「われわれ意識」を形成して、「認識の共同体」の創造につながるということを言っています。これに基づいて、英語力の向上がアジア人意識を生むといった「英語力仮説」があるかどうかということを検証した研究があります。

私ともう一人の人で書いた論文と言うのは、これに反証するような形で書いたものです。アジアバロメーターとアジア学生調査という、ふたつのサーベイを使って、英語力とアジア人意識、Regional Identity と呼ばれるようなものが、どういった関連にあるのか、相関があるのかどうかということを検証しました。結果だけを簡単に申し上げますと、英語力はアジア人意識やアジア的なものへの関心といったリージョナルな方向とはあまり関係がない。むしろ西洋、英語圏であるとかグローバル社会等に向く傾向が強いということが分かりました。

英語化を取り巻く教育環境

次に英語化を取り巻く環境についてなんですけれども、これは学生の相互理解についてちょっとこれから話したいんですが、相互理解というのはそもそも学生間の交流とか、コミュニケーションによって生まれる結果でありますので、まずは日本を例にして英語化した教育環境がどういうふうになっているのかということを簡単にお話ししようかなと思います。

これは日本における EMDP、英語による学位プログラムが、どういった環境で行われているのかを3つの類型化したものです。ひとつは「グローバル人材育成型」、もうひとつが「クロスロード型」、最後に「出島型」というふうに名付けています。「グローバル人材育成型」というのはほぼ国内学生、つまりいわゆる日本人学生によって成り立っている EMDP で、ご想像に遠くないと思うんですが、「国際」や「グローバル」といった名称が付いていることが多いです。ここでは EMI で行っているんですが、日本人学生がほとんどですので、EMI に行く前に英語自体の教育にかなり注力しなければいけない。こういったプログラムはエリートからマスまで、私立大学を中心に多く展開しています。

次に、「クロスロード型」というのは、クロスロード、交差点ですね。何でクロスロードかというと、スタート地点も違えば、ゴール地点も違うということです。中で一応交わるんだけれども、スタート地点もゴール地点も違うという意味で、クロスロードと言っています。ここでは国内学生と留学生が交じり合っている環境ですね。留学生はそれぞれの大学によって違いますが、3割から8割います。国内学生と留学生で、異なったカリキュラムやアカデミックパスが用意されている。特に各国におけるリーディング大学、いわゆるエリート大学と呼ばれるところや、私立大学を中心に展開されています。

「出島型」というのは、ほぼ留学生、もしくは留学生のみの囲い込みのようなところで、ODA 型と言ったのは、特に発展途上国からの

留学生を中心に、フルスカラシップで、日本の技術を学んで帰り、母国に貢献してもらう形のものです。それからマスの大学の大学院は、これは結果として出島型になってしまうところなんです。大学院のプログラムを用意している大学であっても、日本人の志願者がいなくて、ほぼ中国人留学生だけになっているというような状況ですね。また、国立大学のSTEM系や、Global 30によって作られたプログラムでは、留学生だけを対象にしたものもありましたので、結果として、「出島型」となっているところもあります。

相互理解

それぞれの環境において、こういった交流や、それに伴った相互理解というものがなされているのかというのが、次のスライドです。私の先ほどご紹介しました本の中では、クロスロード型のプログラムにおいてインタビュー調査を行っているのですが、ここではたくさん留学生がおりますので、多様性が生む学びと豊かな交流というものが生まれます。

一方で、ちょっと強い言葉なんですけど、ゲットー化というような状況も起こっています。この言葉は、あまりアジアでは聞かれないのですが、欧州におけるEMIの研究などを読んでいくと時々出てくる言葉です。こういったゲットー化が生まれているかという、それぞれが学んでいる言語、もしくはその習得度によるコミュニティが形成されているんですね。

日本だとこれが純ジャパ、それから帰国、留学生というところに分かります。純ジャパという言葉、皆さん聞いたことがありますでしょうか。純ジャパ、Pure Japaneseなんですけれども、これは例えば日本のクロスロード型の国際教養学部というところに行ってインタビューすると、学生たちが自分のことを自己紹介する時に、My name is buraburabura. と言って、I'm 純ジャパと言うんですね。自分は純粋なジャパニーズである。そこには、日本の両親のもとに

生まれて、日本語環境で育って、日本の学校を過ごしているイコール、だから英語はそんなにできませんという裏のメッセージが含まれています。帰国の人は純ジャパではないので、自分は帰国子女であるということを言います。それに加えて留学生と、この3つのグループに分かれるんですね。

この純ジャパと帰国というグループは、韓国における正試と随試にそれぞれ対応しています。正試というのは、韓国における、日本のセンター試験にあたる、修能という国家統一試験を受けて、正規ルートで大学に入る人たちを指します。その人たちは、いわゆる韓国国内で育った人たちなので、いわゆる純ジャパならぬ純コリアンみたいな学生ですね。随試というのは随時入試と言うんですけれども、日本で言うAO入試などと似ていて、修能ではなく、書類と面接審査など特別な形態の入試で入ってきた帰国生です。それから留学生も、もちろんいます。

もうひとつ韓国にあるコミュニティは海外同胞というコミュニティ、いわゆるキョッポと言われる人たちで、Korean American が最大のグループです。韓国の同胞は実は色んなところにおいて、高麗族とか朝鮮族、在日韓国人の方とか、色んなグループがあるんですけれども、このEMDPに集まるのは主にKorean Americanです。高麗族とか、朝鮮族の人はそこにはあまり行きません。

このように、話す・学んでいる言語によるコミュニティというのが形成されていて、そのコミュニティというのは、決して国籍でまとまっているわけではありません。もちろん国籍と言語というものが一致している時は、国籍でまとまることもあるんですが、言語とその運用能力というものがひとつのコミュニティを結ぶ、大きな媒介要素というものになっているということが分かっています。

グローバル人材育成型においては、まず国際化におけるふたつの方向性を指摘したいと思います。ひとつは内的な需要、変容としての国際

化です。つまり、日本をもしくは自分自身をどのように国際社会に対応するために変えていくかということです。ここには、例えば異文化理解なども入りますし、自分がどういうふう認識を変えていくかという部分が入ります。

ふたつ目は対外拡大、展開の戦略としての国際化ということで、日本をどうやって国際的に知らしめていくか、という意味での国際化があると思います。グローバル人材育成型のプログラムにも色んなプログラムがあって一様にはもちろん言えないんですけども、ここで言われている「グローバル人材」という言葉は、政府のグローバル人材育成事業にもありますように、例えば「日本人のアイデンティティを持った人材」という政府の意図が非常に強い形で付度されているイメージがあります。このグローバル人材は、いわゆる地球市民とか、Global Citizen と呼ばれているようなものとはちょっと違うのです。

出島型に関しては、そもそも国内学生との接触が非常に少ない。特にODA型であったり、Global 30のプログラムなどでは、修士で2年間、博士で3年間という限られた時間の中で、学生たちに学位を取らせて帰さなければいけないということで、非常にインテンシブな教育や研究活動を行ないます。とすると、日本に留学しているけれども、日本に留学した意義が何だろうというところで、実際にそこで、本当に日本に対する理解が生まれているのか、もしくは日本人との交流や相互理解というのが生まれているのかということ、疑問になることもあります。

英語化のもたらす正の側面

まず、英語化のもたらす正の側面について、どういった変容があるのかということ、3つあげたいと思います。

一つ目は、英語化によって、様々な教員がこの分野に、大学への教育に入ってきたことです。外国籍であったりとか、あとは女性であったりとか、海外留学、学位を持っている人で

あったりとか、教える側に多様性をもたらすということですね。

二つ目のアカデミックカルチャーというのは、特に社会科学において顕著だと思うんですけども、特に英語圏の社会科学研究では、かなりしっかりとしたりサーチデザインを持っていますので、そういうものを教えるようになります。学生に読ませる文献量についても、日本の大学はあまり学生にこれを読んでこいと言わないけれども、海外で勉強をしてきた人には、明日、来週までに100ページ読んでくる、というような経験が当たり前のようになっていますので、そういったカルチャーに関しても、変容をもたらすのかなと思います。

最後に教室カルチャーとしては、教授法であったり、学生の態度も当然変わってくると思います。このように、日本の大学へのオルタナティブとしての、今までとは異なった形を提供するものとしてのEMI教育は、もちろん正の側面だけではないと思いますけれども、ポジティブな影響を持っています。

もうひとつは、English as a "neutralizer" というふうに書きましたけれども、英語には中立媒介のような役目があるのではないかと考えています。例として年功序列、つまり大学での先輩、後輩であるとか、ジェンダー規範、それからスクールカーストといったものを壊す、もしくは中立化するような役割を持っているように思います。

ここにある『English-Medium Instruction in Japanese Higher Education』は、つい先日、2週間くらい前にMultilingual Mattersから出た本なのですが、私も「ジェンダーと国際的資質」というタイトルで1章書かせていただきました。日本の大学におけるEMI教育が一体何をもたらしたかというのを質的に見ていった研究で、英語というものが、例えば先輩・後輩の中で敬語を使わなければいけない関係をどんどん崩していったとか、またEMI教育の授業には女子学生が非常に多いんですが、女子学生が非常に

強いリーダーシップを持って議論をリードしていくといったような状況が見られたことを書いています。そういった意味で、英語は中立的な役割というものを果たしているのではないかなと思います。

英語化がもたらす負の側面

負の側面に関しましては、社会的な問題、それから教育上の問題に分けられます。社会的な問題としては、English Divide、英語格差です。なぜその格差がもたらされるのかというと、家庭の経済資本や文化資本の影響が大きいと思います。学生のインタビューでよく出てくるのは、英語ができる子に、何で英語ができるのと聞くと、ただただ運がよかったからというふうに答える子が非常に多いです。もちろん英語ができるというのは個人の努力にもよるんですけども、その子が受けてきた教育的な機会であるとか、家庭的な背景、文化資本と呼ばれるようなものに非常に大きく影響されています。そういうものが、英語格差を広げていると言えるのかなと思います。

それから国際化における国内大学間格差ということで、これもスーパーグローバル創成事業のような国家支援を受けられるエリート大学と、それ以外のマスの大学との格差がどんどん開いています。それから先ほど動機のところであげましたけれども、日本の大学というのはステッピングストーン化し、セカンドチャンス化していくということで、英語圏大学へ頭脳が流出していくという可能性も捨てきれないのかなと思います。

教育上の問題としては、質の低い英語の使用による教育・研究の質の低下があります。それから、英語力の習得のための時間が増えることによって、専門教育のための時間が減ってしまうことも問題です。さらに、英語偏重になってしまって、英語以外の言語への注目が低下してしまうことも、負の側面としてあげられると思います。

大学での EMI 実戦で浮かび上がる日本の大学生が抱える問題

この後島田先生と佐渡島先生が、実践的な問題についてたくさんお話ししてくださると思いますので、私の方ではただ問題提起だけに留めたいと思います。私は EMI の実践として、横浜市立大学という横浜市の公立大学でここ 5 年間ぐらい、多文化交流ゼミというタイトルで英語によるゼミを行っています。そこには、外国人留学生もいます。日本人学生もいるんですけども、そこで感じた、外国人留学生と比較して日本の大学生は何が足りないかということを中心にまとめました。

まとめると、全てが足りないように見えるんですが、ひとつ申し上げておきたいことは、横浜市立大学の学生は、非常に真面目な学生で、本当に優秀な学生が多いということです。レベルとしては、MARCH レベルの偏差値があって、学力も高い学生です。それでも外国人留学生、つまり、交換留学で同じようなレベルの大学から来ている学生と比較して、圧倒的に英語力が低い。それから、圧倒的に話せない、書けない、論理的思考力がないというような問題があります。

特に毎週レポート、英語のエッセイを書いてもらって提出をしてもらって、私が添削をしているんですけども、まず調べて書くことができない。外国人留学生に比べて、圧倒的に読んでいる量が少ない。引用文献が非常に少ない。それから、自分の意見を持つということをあまり経験してきていないんだと思うんですね。なので、主体性がないんです。よくあるパターンは、調べ学習のようなまとめを最初に書いて、最後に I hope から始める conclusion がくるものです。I hope, この社会がよくなっていったらいいな、というお祈り文が入ったりとかするんですね。

中等教育までで日本が行ってきた教育というものが、その学生の能力となって、この大学で露呈しているというふうに感じます。下のとこ

ろにまとめましたが、読んでいる量が少ないであるとか、アウトプットの英語、speaking, writing を磨く機会がないとか、それから感情ではなく論理を用いて、自分の意見を表明する機会が少ないのではないかと思います。自分の経験などの話は非常にうまいんですけども、論理的な展開をする機会が、いままで少なかったからできないのではないか。それからあまり教員に対してチャレンジしない。何か、例えば出てきたサーベイがそれはちょっとおかしいんじゃないのというようなことがあったとしても、それについて何も言わない。批判的思考というものが、あまりリスペクトされと思っていないというようなことがあるかなと思います。

まとめ

今日の私の講演のまとめは、高等教育における英語が、果たして万能薬なのか、それとも伝染病なのかという問いです。社会言語学の人、特に言語帝国主義批判をする研究者から見ると、英語というのは伝染病のようなものだというような、批判的な見方があるんですけども、高等教育研究者の私から見ると、これは万能薬でもないし、伝染病でもないのです。ポジティブなアウトカムもあれば、ネガティブなものもあるといった結論になるのかなと思います。

英語は、スキルや英語教育の中の枠組みだけで考えるだけではなくて、今回お話ししましたように、日本の大学教育であったり、それが抱える様々な課題を解決するための取り組みというもののなかで捉える視点が重要なのではないかなと思います。特に、英語化がどういった正と負の効果をもたらしているのか、その効果や課題は、各高等教育研究機関や教室のコンテキストによっても違います。そういったものを踏まえながら、英語による教育という行為を相対化していくことが必要なのではないかなと考えています。

ふたつ目はちょっと大きな話になってしまう

んですが、英語というのは万能薬ではないので、英語だけでは相互理解であるとか、平和構築のためには不十分であると考えます。いかに複数の言語を手に入れるか、その中でいかに様々な思考のチャンネルを手に入れるか、が重要です。言語を学ぶ過程で、もしくは言語を通して何を学ぶかが重要であって、大学は多言語の学びと実践を可能にするアリーナではないかということで、希望と課題を提示して、私の発表を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

司会（槇石）

嶋内先生、ありがとうございました。もうあと何分か時間があればと思いますが、また後の全体討論でよろしく願い申し上げます。少し時間が押しておりますが、ひとつづらいのご質問でしたらフロアから頂きますのでお願いいたします。

フロア

福島学院大学のカンノと申します。ちょっと教えていただきたいんですが、先生のEMDPsですか、これにつきまして、24大学48学部、大学院で88大学208研究科と、相当の大学でおこなわれていると出ております。その中身についてはその後にグローバル人材育成、クロスロード、出島型とございますけれども、明治大学の大学院で会計学をおしえている方のお話を聞きますと、中国人3人だけだと言うんですね。ですから、あるいは立教大学でもだいたい留学生で、ほとんど日本人が少なくなっている。この辺実際はそういう英語でやっている大学、あるいは大学院で日本人の学生ってどのぐらいの比率なのかが知りたいです。3つのパターンがあるようですが、それがひとつです。

それからもうひとつは留学生がずっと減っているわけですね。日本の場合は圧倒的に今、中国・韓国から見ると本当にわずかになってしまっている。そうすると、日本人ってあまりそ

ういうところに留学しない。特に英語圏ですね。それからその辺の理由、関連ですね。日本の英語の大学、大学院に行くよりは、本来だったら留学しちゃうんじゃないかと思うんですね。

それからもうひとつは、早稲田大学は4、5年前になるかと思いますが、例えばダブルディグリープログラムということで、多分中国でいうと北京の清華大学、あるいは上海の復旦大学と、ダブルディグリーをやってらっしゃるというふうに報道されました。私学事業団でもそれについて補助金を出す形になった経緯があるわけでありまして。その場合に、どのぐらい4年間でふたつの学位を取るという学生さんがいらっしゃるか、もしお分かりになれば教えていただきたい。以上3つです。よろしくお願いします。

嶋内助手

ありがとうございます。多分時間があまりないと思いますので、ごく手短にお答えいたします。

まずひとつ目の日本人の割り当て問題ですね。確かに出島型と私がカテゴライズしたものの中には、英語プログラムを作ったけれども、実際に日本人は来ない、外国人留学生だけだというケースもあると思います。ただ割合的に一番多いのは、実はグローバル人材型と言われていてもので、英語によるプログラムの恩恵を受けているのは、日本人学生なんですね。数的にどのぐらいあるかという時、最新のデータはちょっと手元に持っていないんですけども、私が博論を書いた時点で、全体の3、4割近くがグローバル人材型になっています。多分今ではもっと増えていると思います。特に国際教養学部とか、国際学部とか、グローバル教養とか、そういった名前で展開されていて、日本人を対象としているので英語でやると言いつつも、初めは英語教育というものを、かなり注力してやっているような学部になっています。

ふたつ目に日本人の留学がなぜ、それほど伸びていないのかという理由についてです。特に

近年では日本にくる留学生は、韓国人や中国人は減っていますけれども、一方でベトナム人とネパール人が非常に増えています。そうすると、やはりどうしても英語で行うプログラムの必要性が上がっていると思います。反対に、日本人の送り出しはというと、決して急激に下がっているわけではなくて、長期留学に行く人は下がっているけれども、短期留学で行く人の数は結構増えてきているという状況があります。やはりそこは就職との関連であるとか、経済的な問題であるとか、留学に対する意識以外の部分で、様々な制約があって、数としては長期留学が減っているというような現状があるのかなと思います。ただ、昔と比べてアメリカへの留学生数は減っていますけれども、行き先に関しては多様化しているので、そういう意味では日本人の留学に対する意識が、全体的に減っているかということそうではなくて、どちらかと言うと二極化というような言い方が正しいのかなと思います。

ダブルディグリーに関しては申し訳ありません。正確なデータは、私は持っていません。もしかしたら佐渡島先生とか他の先生がご存知かもしれません。ただ、ダブルディグリープログラム自体は非常に人気のあるプログラムだと伺っておりますので、数は今申し上げられなくて申し訳ないんですが、また後で機会がありましたら調べてお渡ししたいと思います。どうもありがとうございました。

フロア

ありがとうございます。

司会（槇石）

ご回答をありがとうございます。それでは、少し時間が過ぎておりますが、司会の方にマイクをお返します。嶋内先生、どうもありがとうございました。

大学教育の英語化と 留学・アイデンティティ・相互理解

2017年11月29日（水）
平成29年度IDE大学セミナー
嶋内 佐絵
早稲田大学 アジア太平洋研究センター
saereal@gmail.com

1

本報告の概要

1. 大学教育の英語化
 - 留学（学生移動・留学動機）
 - アイデンティティ
 - 相互理解
2. 大学における英語化がもたらした教育・学習における変容と課題、正と負の側面



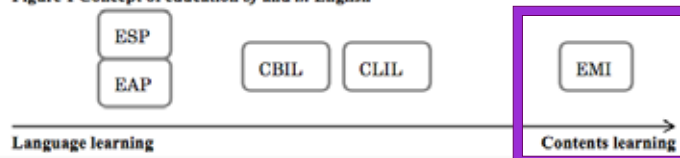
2

大学教育の英語化とは

オランダ (1,078)、ドイツ (1,030)、スウェーデン (822)

- English-taught Programs (ETPs) at 欧州
725 ETPs (2002), 2,389ETPs (2008), 8,089 (2014)
- English-medium Degree Programs (EMDPs)
(英語のみで学位を取得できるプログラム)
学部：24大学48学部、大学院：88大学208研究科
- English-medium Instruction (EMI)
the use of the English language to teach academic subjects in countries or jurisdictions where the first language of the majority of the population is not English” (Dearden 2014:4)

Figure 1 Concept of education of and in English



3

大学の英語化の背景

国内的要因

- 国際化政策と重点的支援
- 「グローバル人材」の要請
- 少子化による大学入学人口の縮小、家庭の経済力低下
→国内留学先としてのEMDP
- 言語的障壁（学術言語としての日本語）の克服

国際的要因

- 国際共通語としての英語
- 世界的な留学生獲得競争
- 世界大学ランキング
- Publish '*in English*' or Perish
- Academic Imperialism (Altbach 2007) and Linguistic (English) Imperialism (Philipson 2009)

4

Countries and Regions	Universities Ranking in Top 200 in 2010-2011	Universities Ranking in Top 200 in 2016-2017
ENL (inner circle) countries	122	116 ▼
Non-ENL countries	78	84 △
3 EMI leaders in Europe	30 - Netherlands 10 - Germany 14 - Sweden 6	41 △ - Netherlands 13 - Germany 22 - Sweden 6
Asia	25 - Hong Kong & Singapore 6	17 ▼ - Hong Kong & Singapore 6

Source: The Times Higher Education World University Rankings 2011 & 2017

Top 200の半分以上はENL (English as a Native Language)=英語圏

ETPs の欧州Top 3

5

英語の価値とは？

「言語に対するリスペクトの低さ」
「大学生はハイパー・グローバルリスト」
「ボトムアップの帝国主義」
「英語への姿勢の二極化」



6

学生移動

- ❖ 量の拡大
前年比約15%増、10年前の約2倍 (JASSO 2017)
- ❖ 多様化
日本語による教育 (Japanese-medium Instruction: JMI) では受け入れられなかった層の獲得
- ❖ 地域化
EMIの最大の受け手はアジア諸国からの留学生 (留学生全体の93%) (JASSO 2017)

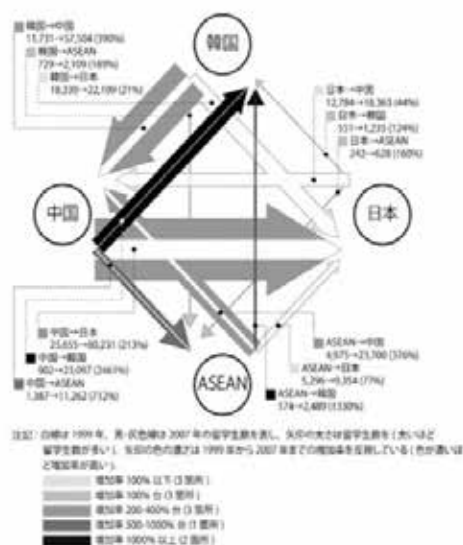
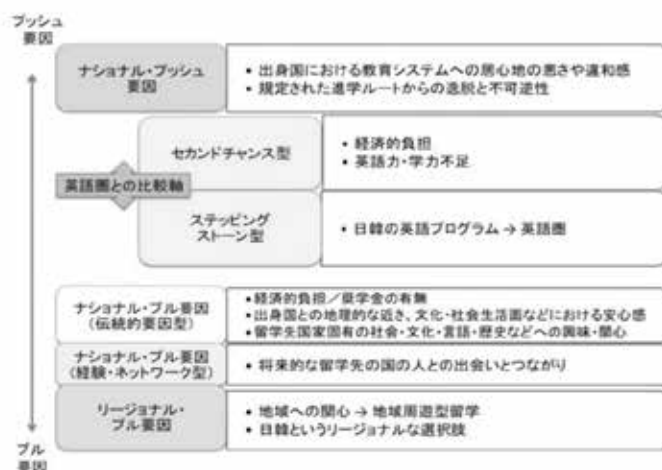


図2 東アジアにおける留学生移動の地域化
(出典) UNESCO Statistical Yearbook および中国教育年鑑をもとに筆者作成。ASEANはデータのある国のみを含む。数値は1999年、2007年もしくは最も近い年次データに基づく。
(嶋内 2016:21)

7

留学動機の複雑化・多層化



(出典) インタビュー調査をもとに筆者作成
(嶋内 2014, 2016)

8

英語とアイデンティティ

人的な相互交流や知的エリートたちの国際移動による地域内コミュニケーションの活性化は「われわれ意識」を形成し、「認識の共同体」の創造につながる
(Adler & Barnett 1998)

“英語力仮説”＝英語能力の向上が「アジア人意識」を生む？

- 英語力があればアジア人意識が増大するという明確な傾向は確認できない（アジアバロメーター）
- 知的エリートに限っては韓国とタイに英語力効果
→「世界市民」としての意識を加えた3変数の関係を見ると英語力は帰属意識一般との相関がある（アジア学生調査）
- 就職・留学をめぐる意識：英語力と欧米企業への志向性（就職）&英語で学べること（留学）の重要視に強い相関
→英語力は、アジア人意識やアジア的なものへの関心といったリージョナルな方向よりは、むしろ（西洋）英語圏・グローバル社会などに向く傾向が強い

（嶋内・寺沢2012、嶋内2016） 9

英語化を取り巻く教育環境 ー日本におけるEMDPの3つの類型化

グローバル 人材育成型

- ほぼ国内学生
- 「国際」「グローバル」系学部
- EMI<<英語教育への注力
- エリートからマスまで私立大学を中心に展開

クロスロード型

- 国内学生＋留学生（3-8割）
- 国内学生と留学生で異なったカリキュラム・パス
- 各国におけるリーディング大学、私立大学を中心に展開

出島型

- ほぼ留学生／留学生のみ
- ODA型、マス大学の大学院、国立大学のSTEM系大学院研究科、Global 30など

10

相互理解

クロスロード型

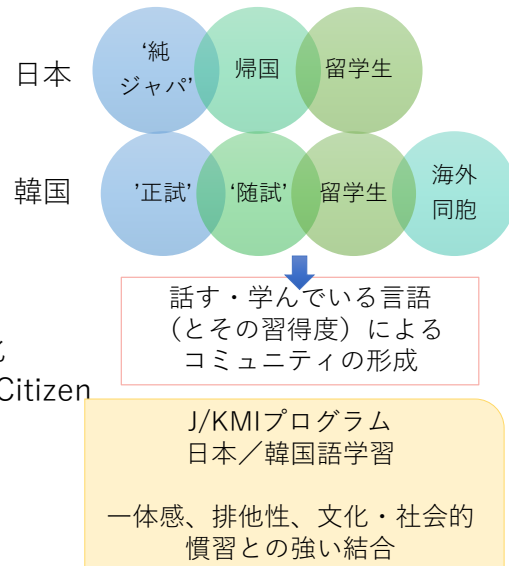
- 多様性が生む学びと豊かな交流
- “Ghettoization”

グローバル人材育成型

- 1). 内的受容・変容としての国際化
- 2). 対外拡大・展開戦略としての国際化
- グローバル人材 ≠ 地球市民・Global Citizen

出島型

- 国内学生との接触が少ない
- 日本に留学する意義



11

英語化のもたらす正の側面

教室内での変容（英語がもたらした新しい学びの形）

- ✓ 教員のバックグラウンド（ex 外国籍・女性・海外留学・学位）
 - ✓ アカデミックカルチャー（ex 研究デザイン、文献量）
 - ✓ 教室カルチャー（ex 教授法、学生の態度）
- 日本の大学教育へのオルタナティブとしてのEMI教育

English as a “neutralizer”

- 年功序列
- ジェンダー規範
- 教室内（スクール）カースト

(Shimauchi 2017)



12

英語化がもたらす負の側面

社会的な問題

- “English Divide” 英語格差
家庭の経済資本＋文化資本
- 国際化における国内大学間格差の拡大
- 英語圏大学への頭脳流出
日本の大学の“ステッピング
ストーン”化 & “セカンドチャ
ンス”化

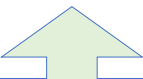
教育上の問題

- 教員・学生双方における質の
低い英語の使用による教育・
研究の質の低下
- 英語力習得のための時間が増
えることによる、不十分な専
門教育
- 英語偏重、英語以外への言語
への注目の低下

13

大学でのEMI実践で浮かび上がる日本の大学生がかかえる問題（教育と言語の視点から）

- ◆発信する力
（英語表現力、コミュニケーション能力、自分の意見を表現する）
- ◆書く力
（読む、調べる、意味のまとまりを作る、組み立てる）
- ◆論理的思考力
（接続詞、経験（だけ）ではなく論理の展開、reasonではなく
rationaleを提示する）

- 
- ❖ 圧倒的に情報摂取量（読んでいる量）が少ない & 情報源が偏っている
 - ❖ アウトプットの英語（スピーキング・ライティング）を磨く機会がない
 - ❖ 感情ではなく論理を用いて自分の意見を表明する機会が少ない
 - ❖ 権威（ex. 教員）にチャレンジしない

14

まとめ “English in higher education: Panacea or pandemic?”

1. 英語を、スキル育成や英語教育のなかでの枠組みで考えるだけでなく、日本の大学教育（が抱える様々な課題を解決するため）の取り組みのなかで捉える視点が重要
→英語化が大学教育にもたらす様々な正と負の効果に注目し、各高等教育機関や教室のコンテキストを踏まえながら、英語による教育という行為を相対化する
2. 英語だけでは（相互理解、平和構築のために）不十分
→いかに複数の言語を手に入れるか＝いかに様々な思考のチャンネルを手に入れるか、言語を学ぶ過程で、もしくは言語を通して何を学ぶかが重要であり、大学は多言語の学びと実践を可能にするアリーナ

15

参考文献

- “Gender in English-Medium Instruction: Differences in International Awareness?”, Sae Shimauchi, In Bradford, A. & Brown, H. (eds.), *English-medium Instruction at Universities in Japan: Policy, Challenges and Outcomes*, Chapter 11, 180-194, Multilingual Matters, 2017.
- “English-medium Degree Programs in Internationalization of Japanese Universities: Conceptual Models and Critical Issues”, Sae Shimauchi, *Journal of Asia-Pacific studies*, Institute of Asia-Pacific Studies, Waseda University, No. 29, 105-118, 2007.
- The Times Higher Education *World University Rankings 2016-2017*
Doi: https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#/page/0/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/scores
- Wächter, B., & Maiworm, F. (Eds.). (2014). *English-taught programmes in European higher education: The state of play in 2014*. Lemmens Medien GmbH. Doi: http://www.aca-secretariat.be/fileadmin/aca_docs/images/members/ACA-2015_English-Taught_01.pdf
- 嶋内佐絵『東アジアにおける留学生移動のパラダイム転換—大学国際化と「英語プログラム」の日韓比較』, 嶋内佐絵, 東信堂, 2016.
- 嶋内佐絵「なぜ英語プログラムに留学するのか？—日韓高等教育留学におけるプッシュ・プル要因の質的分析を通して」, 嶋内佐絵, 『教育社会学研究』日本教育社会学会, 第94集, 303-324, 2014.
- 嶋内佐絵・寺沢拓敏「英語力がアジア人意識に及ぼす効果～アジア・バロメーターとアジア学生調査の計量分析を通して～」, 『アジア英語研究』, 日本「アジア英語」学会, 第14号, 85-106, 2012.
- 日本学生支援機構 (2017) 平成28年度外国人留学生在籍情報調査結果
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2016/index.html
- 文部科学省高等教育局 (2016) 「平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（平成28年12月13日）（55-56頁）
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/11/21/1380019_1.pdf

16

講演 2 国語教育が育てる大学生の言葉の力

筑波大学人文社会系／アドミッションセンター長

島田 康行 教授

司会者 関内 隆 特任教授

(東北大学高度教養教育・学生支援機構)

関内でございます。続きまして、「国語教育が育てる大学生の言葉の力」と題しまして、筑波大学の島田先生にご講演をお願いいたします。島田先生につきましては、お手元のプログラムの8ページをご覧ください。島田先生は、筑波大学の大学院を修了され、その後高等学校の教諭、文部省の教科書調査官を務められまして、筑波大学の方に移られ、現在は筑波大学のアドミッションセンター長になっておられます。国語教育について、高校での国語教育と高大接続という視点からご講演をいただけたと思います。それでは島田先生、さっそくですが、よろしくお願いいたします。



関内 隆 特任教授

島田 康行 教授

皆さん、こんにちは。筑波大学の島田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。「国語教育が育てる大学生の言葉の力」というタイトルを付けましたが、ご紹介いただきましたような中等教育における教科「国語」の指導の課題を指摘することによって、実際には、国語教



島田 康行 教授

育が「育てない」大学生の言葉の力といったところをお話しすることになるのかなと思います。

ご紹介いただきましたように、私はキャリアの最初は中学校、高等学校の教員でありました。その後高専に移りました。また教科書調査官という仕事を通じまして、ずっと国語教育という分野に携わってきました。ある時には実践の立場から、ある時には行政の立場から、これに携わってきたということであります。また、大学に移ってからは、高大接続の仕事をするようになり、二足の草鞋状態です。この度の教育改革、また高大接続改革の中では、比較的「国語」に注目が集まっておりまして、共通テストへの記述式の導入といったようなところが象徴的に語られる部分もありますので、今日はそんなこともあってお声がけをいただいたのかなと思っています。

それでは早速ですけれども、内容の方に入ります。まず従来の国語教育の課題、続いて国語科において育てるべき資質・能力とその明確化、さらに教育課程の改訂について、それからそれらを踏まえまして、大学入試改革がどのよ

うに行われようとしているのか、というあたりをお話できればと思っております。

高校「国語」の授業

はじめに国語教育の課題についてです。数年前に東北大学の高等教育開発推進センターのセミナーにお招きいただいた時にも部分的にお話しした内容を図にしてみました。高校の国語の授業が一体今どのようになっているのか、大学の新入生360人の記憶をたどって様子を聞いてみた、という調査の結果です。

まず、こんな質問をしました。「高校の国語の授業で、400字程度以上の文章を書いた経験というのがどれくらいありますか」ということで、回数を聞いたわけです。新入生360人は、筑波大学の学生と、それからもうひとつ九州大学の学生、ほぼ半々ぐらいです。結果ご覧の通りで、一番大きな割合を占めているのは「0回」というところで41%です。次が「1回から3回」ということで22%です。0回から3回まで、1年に1回以下というところで60%以上を占めるということになるわけです。調査対象は、文系理系がほぼ半々ぐらい、理系の方がちょっと多かったですが、でも理系も文系も入っている、そういう学生たちです。

ということで、会場内ではこういうデータを見て驚かれる方が多いのかなと思いますけれども、実はこれを見ても驚かない人たちがいるのです。それは高校の国語の先生たちです。彼らにはもちろん自覚がある。ただ、「7回以上」と回答した中には、これは非常にたくさん経験したという学生も少なからず含まれておりまして、実態としては、1年に1回書かせるか書かせないかというような教室が60%以上ある一方で、非常に熱心に「書くこと」に取り組まれている先生方もいらっしゃるということで、言わば二極化のような状態にあるんだということがひとつ指摘できようかと思えます。

高校国語教育の課題

こういう状況の中で、この度の教育課程の改訂は進んでいるわけです。改訂の議論の中で、中教審の国語ワーキンググループというところが取りまとめた国語教育の課題としては、教材の読み取りが指導の中心になることが多い、と。教材の読み取り、つまり読むことですよね。高校までの教科「国語」の内容には3つの領域があって、ひとつは「話すこと・聞くこと」、もうひとつが「書くこと」、3つ目が「読むこと」であります。教材の読み取りというのは「読むこと」ですね。「読むこと」の指導が中心になることが多いというのが問題とされています。

それからもうひとつの課題は、主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないということです。「話すこと・聞くこと」と「書くこと」という、「読むこと」以外の2領域の学習が不十分であるということが課題として指摘されたわけです。こういう前提に立って、今日の教育課程の改訂は進んでいるということになります。

課題のひとつ目の、教材の読み取りが指導の中心になっているというのは、先ほどの酒井先生のお話の中でも最近の大学生は読書をほとんどしないというお話がちょっとありましたけれども、読み取りは授業の中心なんだけれども、そのことが高校生の主体的な読書には必ずしもつながっていないということになります。教科書内の教材の文章を精読するという行為も、そこに留まってしまって、興味・関心のあるところについて自分から本を手にとって読むというところには、どうもうまく結びついていない、そんなこともひとつの課題であろうかと私は思います。

高等学校学習指導要領「国語」

「国語」の必修科目である「国語総合」について、学習指導要領では、「書くこと」の指導には1年のうちに30から40単位時間程度を配

当するという規定になっています。「話すこと、聞くこと」には、話し合うことも含めて、15から25単位時間を配当することになっています。しかし、実際には「読むこと」に非常に偏っているという状況があるということです。

「書くこと」の30単位から40単位時間の中で、どんなことをしなければいけないのか、高校で学ばなければいけないのかという、具体的な指導内容としてここに挙げたような項目が上がっているわけです。3領域のそれぞれについて、このような4つ、あるいは5つの「指導事項」というのが、それぞれ具体的に挙げられます。

ここで見ると、例えば、「書くこと」のイですね。「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること」が、指導しなければいけない事項の中に挙げられているわけです。また、このような指導事項は、次のような言語活動を通して行わなければいけないということも、同じように定めてあります。例えば「出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見等を書くこと」と。「言語活動」というのは、主体的で探究的な学習活動でありますけれども、そのような活動の中で、論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめるような指導をしなければいけないことになっているのです。

ところが実際には、このような学習指導要領の規定にもかかわらず、400字程度以上の文章を書いた経験がほとんどないまま大学に進学する学生が少なからずいる、といった状況があるわけです。

高校「国語」の授業

会場内には高等学校の先生方がいらっしゃるのも知っておりまして、こんなことばかり言っているのが嫌われるのですけれども、もう少し、高校における授業の実態というのを調べてみようと思ひまして、何年か前に大学新入生を対象とする振り返り調査を、範囲を広げて実施

してみました。これは日本各地の総合大学です。受験学力的に言うと、比較的恵まれた大学7校の新入生、約600名を対象として、質問紙調査を実施いたしました。

調査の内容は、ご覧のようなものです。「高校3年間に受けた教科「国語」の各科目の授業において、主にどのような指導を受けたと感じますか」、あるいは「記憶していますか」という問い方だったか、そのような質問をしました。そして各項目について、「1 十分に指導された」から「5 ほとんど指導されていない」の5段階で答えてもらいました。項目を23用意して、それぞれについて5段階、十分に学んだと記憶しているか、ほとんど学んでいないと記憶しているか、約600人の大学新入生に聞いてみたというものです。

この23の項目ですけれども、これは一体どういうものか、どこから引っ張ってきたものかと言いますと、実は高等学校国語の学習指導要領の指導事項の文言を、ほぼそのまま引用したものです。ここに今1)から5)としてあげてあるのは必修科目「国語総合」の中で、例えば「読むこと」に位置付けられている指導事項、5つのうちの3つですかね。それから「話すこと・聞くこと」の指導事項です。それから22)23)は、これは言語活動例ということになります。これらの項目を果たして大学新入生はどれくらい学んだというふうに記憶しているのかということを調べてみたということでもあります。

結果、ご覧の通りです。これは横軸が1)から23)までの各項目です。全てをお見せしていませんけれども各項目です。縦軸は、その5段階の評価で、値が低いほどよく学んだということです。値が高くなるほどほとんど学んでいないということです。各項目によって、かなりばらつきがあるということが見て取れます。文系・理系は、高校時代のクラスです。高校時代に文系クラスに所属したか、理系クラスに所属したかということも答えてもらっているのです、文系、理系別々に集計した結果です。そうする

と、例えば項目1)については、文系の子はこれぐらい、理系の子はこれぐらい学んだと記憶しているという、そういう図です。

ご覧いただきまして分かる通り、かなり項目によってばらつきがあるんですけれども、これはどのようなばらつきかと言いますと、「読むこと」の指導事項についてはやはりよく学んでいると記憶されています。一方で「話すこと・聞くこと」「書くこと」に関する指導事項は、「読むこと」に比べるとやっぱり値が明らかに高くなっていて、あまり学んだとは記憶されていないということになります。これは「国語表現」という別の科目の指導事項ですけれども、やっぱりアウトプット系の表現系の科目の指導事項は値が高いです。「現代文」という読むことに関する科目の値はやっぱり低く、よく学んでいるということが見て取れます。

ということで、高校の国語の授業が「読むこと」に偏っているという印象は、それを通過してきた学生たち、あるいは授業をしている教師たちも等しく持っているだろうという予想はあったんですけれども、数値としてもこのようにはっきりと見て取ることができたというわけです。

それから、これは文系・理系に分けて集計をしているので、せっかくですからそのことにもちょっと触れますけれども、ご覧のように、ほとんど全ての項目で、文系の値の方が理系の値よりも低くなっている。すなわち、文系の方がよく学んだと記憶をしているということになります。それはまあもちろんそうです。選択科目も違って来ますので、それは違って不思議はないですけれども、統計的に有意な差がある項目もいくつかあります。それはどういう項目なのかというと、実はみな「読むこと」に関する項目なんです。「読むこと」の指導事項については、文系の生徒はよりよく学んでいる。理系の方もよく学んでいるけれども、文系の方がよく学んでいる。それに比べると「話すこと・聞くこと」あるいは「書くこと」は文理の別に関

わりなく、あまり学んでいないということになるかと思われます。

また、この後半の17) 18) から23) は、いわゆる言語活動例の項目です。例えば古文や現代文を比較して読んでみましょうとか、自分で課題を見つけて調査をして、それをまとめて発表してみましょうというような言語活動の例です。こちらについては他の項目と比べてもひときわ値が高く、大学に入ってきた新入生たちは、高校時代にこのような学習活動をあまり経験しなかったと記憶していることが指摘できようかと思います。

このような高校の授業の実態を課題と捉え、それを踏まえた教育課程の改訂が進んでいるということです。

大学初年次教育

このような新入生を受け入れて、大学の方はいかにどのように対応しているのかということになるわけですが、次にご覧いただくのは、大学の初年次教育が平成18年から26年度までに、どのように増えてきたかという、文科省の公表しているデータです。平成18年度当時は全体の70%程度の大学で初年次教育が行われていましたけれども、今やもう、ほとんどどこの大学でも、90%を超える大学で初年次教育というものが行われています。

その初年次教育、一体どういうものが具体的な内容としてはあるのかというと、これはちょっと見にくい表になりますけれども、さまざまな項目について平成20年度と26年度の2年度分を比較して示したものです。その中で、平成26年度では最も多いのはどんな項目なのかというと「レポートや論文の書き方等の文章作法」、これを初年次教育の中で行っているという大学が非常に多い。2番目に多いのはこれです。「プレゼンテーションやディスカッション等口頭発表の技法」。これについて指導をしているという大学が2番目に多いということになります。

こうした指導の取組みは、大学での学びへの

導きという観点からはそれとして合理的に思えます。私は実際にこのような初年次教育のクラスを大学の中で担当をしています。まさにレポートや論文の書き方、文章作成を指導するような初年次教育のクラスを持っていますが、そこではレポートや論文の書き方の作法を教えているのかというと、必ずしもそうではないです。やはりもう少し基礎的な部分から、例えば「論じる」というのはどういうことなのかとか、論証するとはどういうプロセスなのかとか、意見を述べるとためにはどういう構造が必要なのかとか、そのあたりの基礎的なところから指導していくことになります。

これは授業としてそういうものがあるという例です。そのほかにも例えば大学図書館がプラットフォームとなってさまざまな学習支援をしております、私はその中のライティング支援セミナーというのも担当しています。そこでもやはり同じように、大学初年次生を一応のターゲットにして、論文の書き方、レポートの書き方について話をしているのですが、いざ集まってきた学生たちを見ると1年生よりも上級生とか、大学院生とか研究生とか、そういった人たちが思いのほか多いということがしばしばあります。

大学としては、こういうところに少なからぬコストをかけてやっているわけで、それが本当に、論文の書き方の細かい部分と言いますか、いわゆる作法のようなところを教えれば済むのであればよいのですがなかなかそうはいきません。中等教育までの国語の中で、学習指導要領のとおり、これらの基礎が確実に学ばれてくれば、大学初年次教育というのはもう少し先からスタートを切ることができるのかなと思うわけです。中等教育に過剰な期待をしているわけではなくて、カリキュラムの中に明確に位置付けられた指導内容は、少なくとも身に付けてきてほしいところだなと日頃から思っているところです。

国語科において育成を目指す資質・能力

さて、そういうようなことも踏まえて、この度の中等教育の教育課程の改訂は進んでいます。今のような課題を踏まえると、当然、論理的に思考してそれを表現するとか、あるいは批判的に考えるとか、そういったことを重視していくということになります。

今ご覧いただいているスライドは、これも国語ワーキングでまとめたものです。国語科において育成を目指す資質・能力を整理した表になります。スライドでもプリントでもちょっとご覧になるにいくと思います。webに公開されているものですので、後ほどご確認いただければと思います。この表で、国語科で育成を目指す資質・能力として、赤線で囲ったこのあたりには注目すべき内容が入っています。

例えば、「論理的思考の側面」として次のようなものが挙げられています。「情報を多角的、多面的に精査し、構造化する力」「推論および既有知識や経験による内容の補足や精緻化」「論理（情報と情報との関係性）の吟味や構築」また「情報の妥当性や信頼性の吟味」などです。

国語科ではこういった資質・能力の育成を目指していくということです。それから下の方には、「新しい情報をすでに持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」というような力が挙げられています。特に、新しい情報を構造化するという点に関しては、酒井先生のお話の中でも、授業を聞いてそれをノートに書き取ったものは概念の定着がよい、というお話がありました。話を聞くときには、その内容を1から10まで並列してずっと書き連ねていけばよいのではなくて、話に含まれていたいいくつかの情報の軽重と言いますか、これは重要な情報である、これはそれほど重要ではない情報であるというように判断をして、情報をきちんと構造化して階層化して考える、捉えるということが求められます。それはノートを取る時にも必要になると思うんですが、ここではそうい

う力の育成を目指すということを言っています。また、新しい情報を統合して構造化するような力の育成を目指すというようなことも言われています。

このような資質・能力の整理をもとにして、今年の3月に小学校、そして中学校の学習指導要領が告示をされたところです。中学校の学習指導要領の中では、初めて指導事項において「批判的に」という言葉が使われています。高等学校の学習指導要領の改訂は、今作業中であります。本年度末までにこうした資質・能力の整理を踏まえて、そしてすでに公表された小学校、中学校の学習指導要領を踏まえて、その上に立つようなものが新たに告示されることになります。

また、その新しい教育課程のもとでは、科目の構成も変わります。今は「国語総合」という必修科目がひとつあり、その先は選択科目になっていくわけですが、新しい教育課程のもとでは必修科目がふたつになります。2単位の科目がふたつになって、ひとつは「現代の国語」、もうひとつは「言語文化」となります。選択科目は4つ並びますが、そのうちのひとつは「論理国語」という名前になることが決まっています。ということで、従来の国語科とは、少し様子の違った国語の授業というのが、教室では展開されることになるのではないかと期待をするところであります。

共通テスト記述式問題の枠組み

さて、最後に高大接続の話です。教育課程の改訂とともに大学入試がどう変わっていくのかということですね。このスライドは、今回の改革の象徴のように語られる共通テストの記述式問題について、その枠組みが今はこのように考えられている、ということを示しています。

すなわち、「多様な文章や図表等をもとに、複数の情報を統合し、構造化して考えをまとめたり」、「根拠に基づいて論述」したりする。そういう能力を評価するような試験にするという

ことです。また、「情報と情報の関係性の吟味・構築」に関わる能力なども、条件付記述式の問題によって評価を試みるということになっています。

この3月に、一度プレテストがありました。そして今まさに、全国の高等学校で5万人規模の試行調査が実施されているところです。今日あたりはそろそろもう終わる頃かと思えますけれども、その調査の問題はここに示したような枠組みによって作られています。

また、評価すべき能力と問題の形式の関係は、ここに示したような形で整理されています。センター試験では、テキストの部分的な内容の把握や理解とかテキストの全体的な精査・解釈によって解答するという、表中の①、②と水色で囲った部分になりますが、これがこれまでのセンター試験では問われていたところでした。

それが、記述式問題の導入によって、①も多少は含むのですけれども、②に加えて③の部分が新たに含まれてくるということです。それは「テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集し、操作して解答する」ような問題です。

さらにその先には、④として「テキストの全体的な精査・解釈を踏まえ、自分の考えと統合・構造化して解答する問題」というのがあるんですけれども、こちらは大学の個別試験などで出題するのが相応しいものです。

共通テストの記述式の問題について、これまでに公表されたプレテストの問題例などを見て、これは本当に「書くこと」の力が測れているのかというような声も、まああることはあるんですけれども、「書くこと」の力は個別試験の論述式の問題と合わせて測るべきもので、これはそのための最初のステップとして作られている問題だとお考えいただければいいのかなと思います。その意味で、共通テストにおいて、テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答するような問題と

ということになると、具体的には今ご覧いただいているようなイメージになるのだろうと思います。

さらに「解答させる内容（問題の例）」として、「テキスト全体の論旨を把握し、目的に応じて必要な情報を付加、統合して比較したり、関連付けたりして論じる」というような問いの形が想定されているわけです。これから先、公表されていくことになる試行調査の問題などをご覧いただくと、確かにそのようになっているとお認めいただければよいかなと思います。先のモデル問題例を見ましても、実際にいくつかの問いの中でこの枠組みに基づいて、作問がなされているということが分かります。こちら公表されておりますので、詳細についてはwebでご確認をいただければと思います。

まさに今、5万人規模の試行調査が実施されていますが、来月中にはその問題が公表されます。速報として、正答率のようなものも合わせて公表されようかなと思います。より詳細な報告についてはもう少し後になろうかなと思いますが、来週中には速報が出るはずですよ。というわけで、教育課程の改訂においても、それから共通テストの記述式問題においても、どうやら論理的思考というようなものを重視するという大きな流れが見えているわけでありまして。

論理的思考力重視の流れ

こうした流れは、ここ数年、あるいはもう少し前の平成24、5年以降、公表されるさまざまな文書や通知の中に垣間見られてきたところがあります。早いところでは平成23年に国立教育政策研究所が実施した「特定の課題に関する調査（論理的な思考）」があります。この時期に、すでに高校生を対象とした大規模調査が行われていたわけです。その時の調査問題が一部改編されて、平成27年の新テストの作問イメージ例として使われたということもありまして、かなり前から論理的思考力を重視する流れはあったのだということになります。

資料に挙げた作問イメージ例ですけれども、もうあまり時間がないので詳述できませんが、このような交通事故に関する3つのグラフを見せて、交通事故の発生件数とけが人の数は同じくらいの時期に減り始めたのに、死者数だけがそれに先んじて減り始めたのは、どうしてかということで仮説を立てよとか、その仮説が正しいことを検証するためにどういうデータが必要なのか、というようなことを答えさせる問題が、国語の作問イメージ例として27年には公表されていたということでもあります。

まとめ

急いでまとめますけれども、今日は国語教育の課題について、また国語教育で育てるべき資質・能力が今どう捉えられているか、それを踏まえて教育課程がどのような方向で改訂されているか、といったことをお話ししてきました。現状は「読むこと」偏重だということ、その現状を踏まえて、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の重視、その中でも論じる力、論理的思考力の重視という方向性を確認しました。また、共通テストに記述式の問題が導入されることは国語教育の改革を進めるひとつの鍵になっていくだろうというところもご確認いただけたかと思います。

以上、用意した話題は全て尽きました。ちょっと時間を過ぎましたけれども、これで私の講演を終わります。どうもありがとうございました。

司会（関内）

はい、島田先生ありがとうございました。高校における国語教育の興味深い実態と、現在の新しい論理的な思考力を計る共通テストの試みについて、お話をいただけたと思います。もう時間、押していますけれども、おひとりぐらい、事実確認を中心に、それでは、よろしく願います。

フロア

大変貴重なご講演，ありがとうございました。東北大学のタシロと申します。理系の教員なんですけれども，科学英語とかそういう授業も担当をさせていただいて，細々とやっている状況なんです，国語に関するお話を伺えて非常に感銘を受けました。

もともと国語っていう名称に何となく違和感を覚えながら，実は高校時代からずっとやって参りました。何で日本語っていう名前じゃないのかなと思ったりしたことがあったんですが，昨今ですと例えばビジネススクール等で，クリティカルシンキング，批判的思考とか，分析的思考とか，そういうものが，かなり大人になってから教え込まれたりしています。あるいはディベート的なものを中高でやっている学校もあるっていうふうに聞くんですけれども，今国語という授業の中で，だいぶ実地的な要素が入ってきたということを伺えて，非常に感銘を受けてなるほどと思いました。

そうしますと方向的には例えば，英語の授業の一環としてやられることが多い気がするんですが，英語とかですとディベートの授業があつて，ただそれもお作法的に，ディベートっていうスタイルを反復，再現することに重きを置かれている傾向があるような気がするんです。実際はその分析，思考するその中身の部分かなというふうに思うことがありまして，そのあたり

も今後国語の授業の中に盛り込まれてくる可能性があると考えてよろしいでしょうか。

島田教授

はい，おっしゃる通りだと思います。新しく必修科目になる「現代の国語」という科目の中では，まさにそうした実用的な言語運用の部分を，ひとつの「方法知」として教えていくことになります。そういう科目として設計される予定です。

また今回の教育課程の改訂を進めるにあたっては，英語も日本語も同じ「言語」だということで，両教科で連携を図りながら，小・中・高の国語と英語の授業を設計していこうという，そういう理念はありました。どこまで実現できるかちょっと分からないですけれども。

フロア

ありがとうございました。

島田教授

はい，ありがとうございます。

司会（関内）

はい，ありがとうございました。それではあらためまして島田先生，ありがとうございました。

国語教育が育てる 大学生の言葉の力

IDEセミナー 2017.11.29
筑波大学 人文社会系 島田康行

1

はじめまして

1985 私立中学校・高等学校 教諭
1987 国立茨城工業高等専門学校 講師
1994 文部省 初等中等教育局 教科書調査官
1999 筑波大学 アドミッションセンター

国語教育

高大接続

- 日本国語教育学会・全国大学国語教育学会
- 中央教育審議会（教育課程部会）国語ワーキンググループ
- 「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」記述式の作問方法検討チーム
- 大学入学者選抜方法の改善に関する協議

2

本日の話題

- 国語教育の課題
- 育てるべき資質・能力の明確化と教育課程の改訂
- 大学入試改革のゆくえ

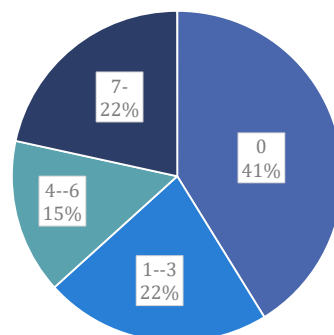
3

高校「国語」の授業

大学新入生360人に質問

高校「国語」の授業で
400字程度以上の文章を
書いた経験（回数）

島田（2012）



4

高校国語教育の課題

- 教材の読み取りが指導の中心になることが多い
- 主体的な表現等が重視された授業が十分行われていない
- 「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習が不十分

中教審 教育課程部会「国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」
(平成28年8月)

5

高等学校学習指導要領「国語」

- 話すこと・聞くこと 15～25単位時間程度を配当
- 書くこと 30～40単位時間程度を配当

ア 相手や目的に応じて題材を選び、文章の形態や文体、語句などを工夫して書くこと
イ 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること
ウ 対象を的確に説明したり描写したりするなど、適切な表現のしかたを考えて書くこと
：
(言語活動)
出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見などを書くこと

6

高校「国語」の授業

大学新生を対象とする振り返り調査

- 2013年3～11月
- 日本各地の総合大学（7校）の新生 598名
- 質問紙調査

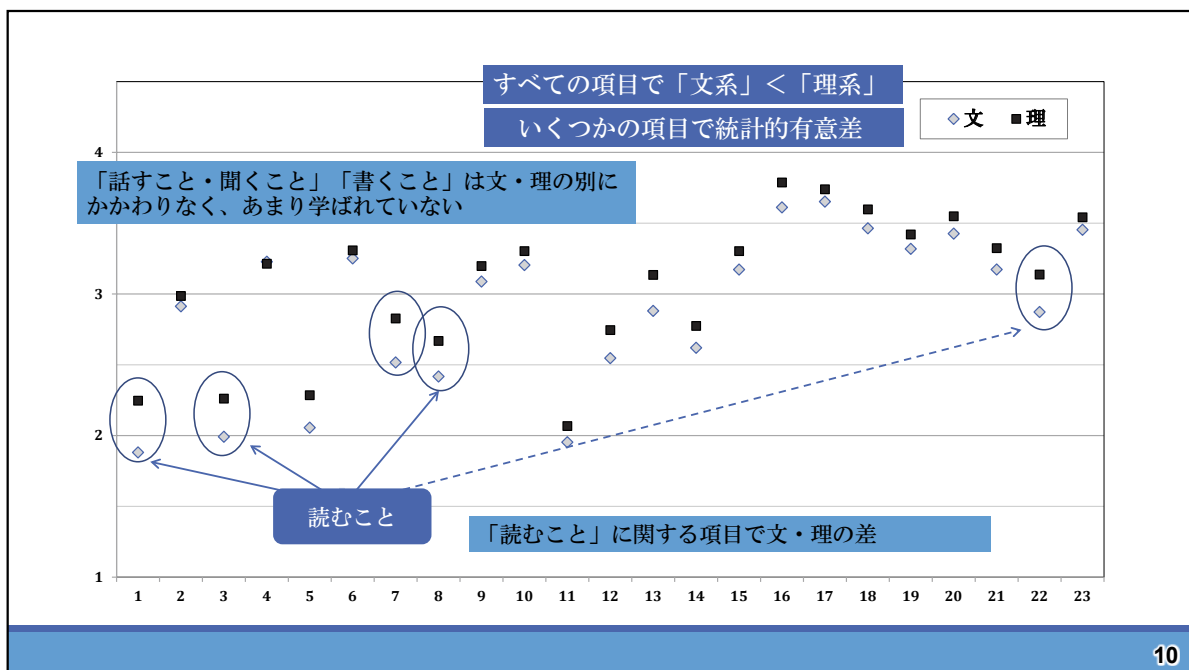
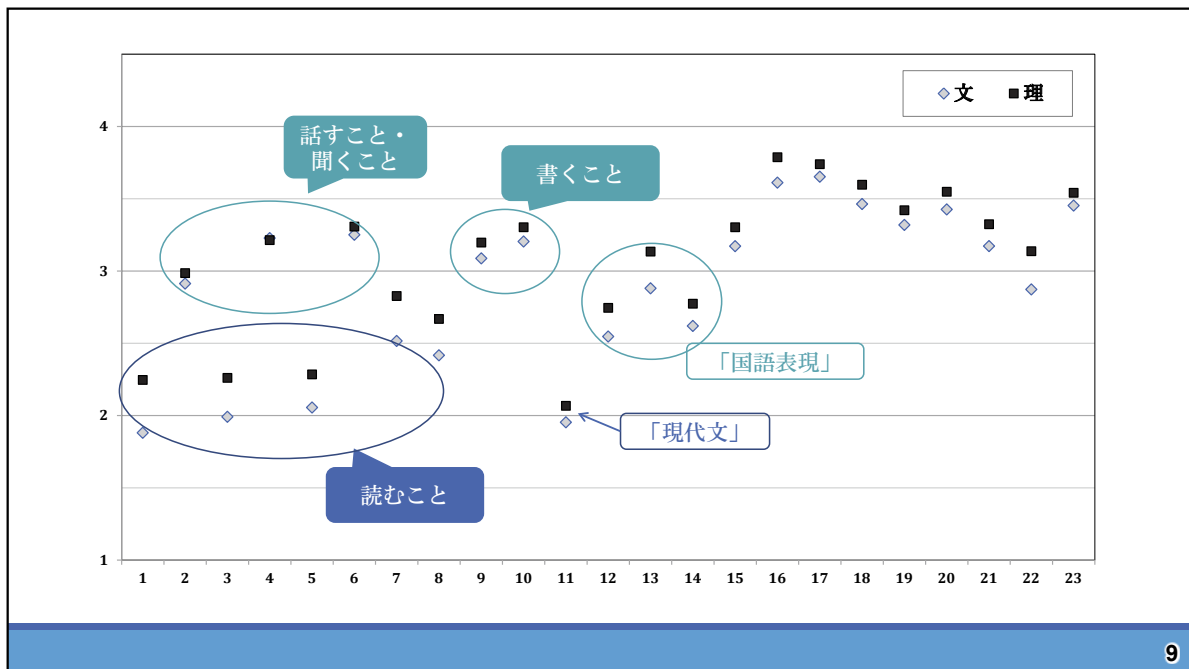
7

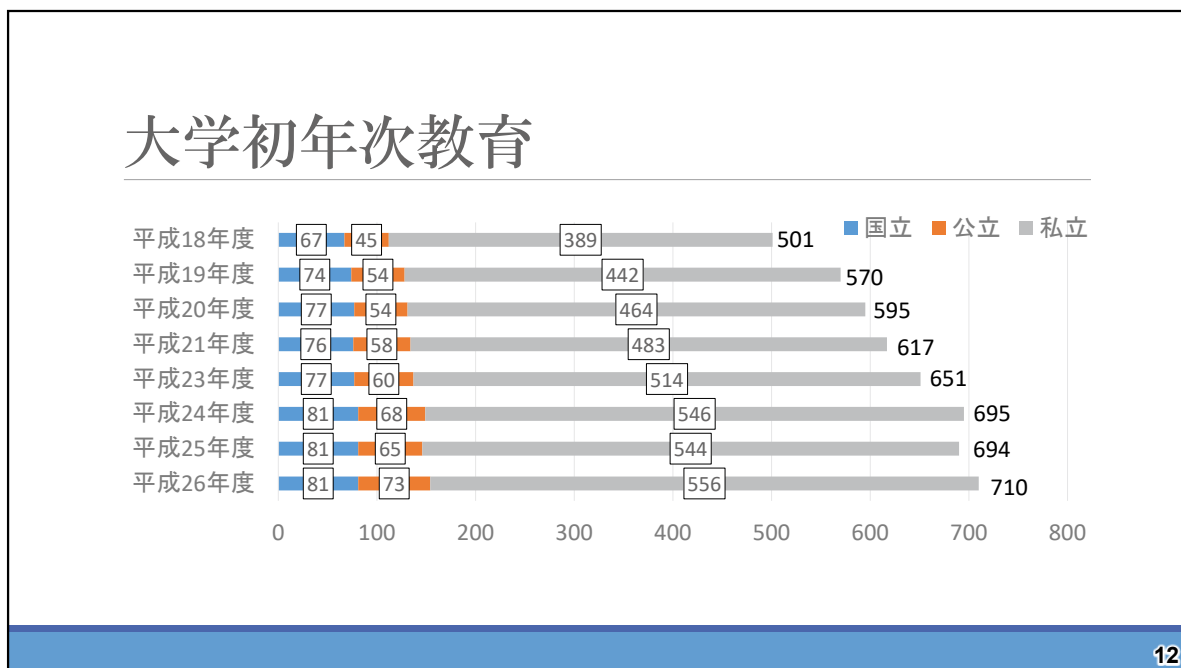
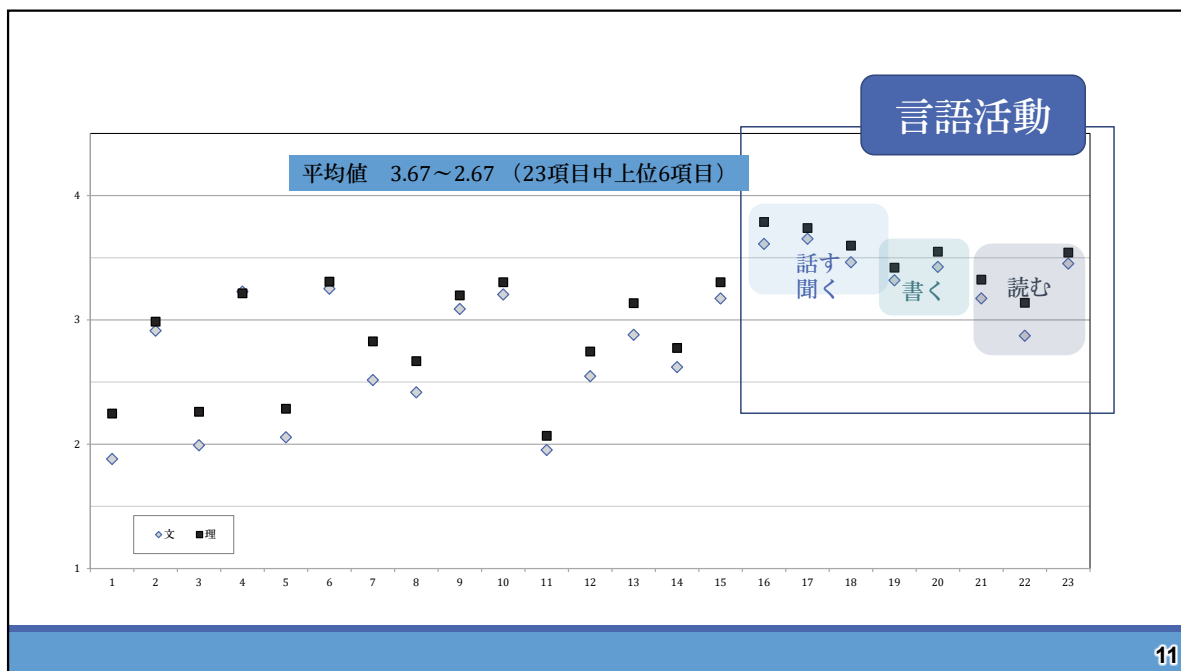
高校3年間に受けた「国語」（「国語総合」「国語表現」等）の授業において、主にどのような指導を受けたと感じますか？

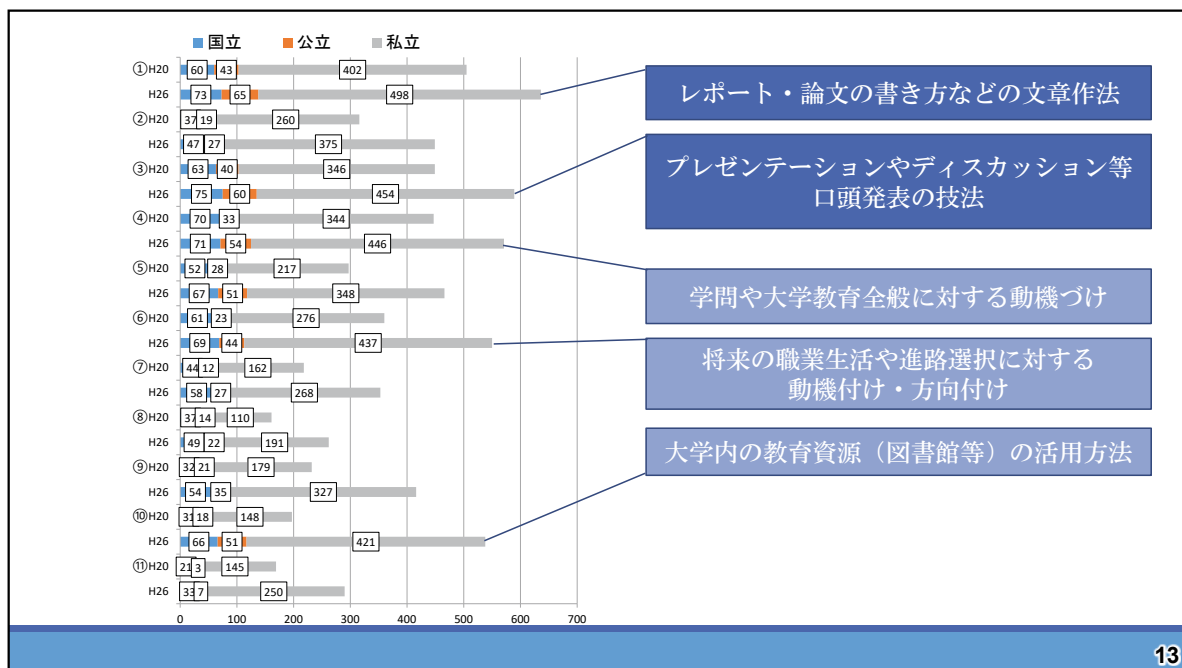
各項について「1 十分に指導された」～「5 ほとんど指導されていない」の5段階でお答えください。

- 1) 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう 
 - 2) 様々な問題について自分の考えをもち、筋道を立てて意見を述べる
 - 3) 文章の内容を的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること
 - 4) 目的や場に応じて効果的に話したり的確に聞き取ったりすること 
 - 5) 文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりすること
- ：
- 22) 考えを広げるため、様々な古典や現代文を読み比べること
 - 23) 課題に応じて必要な情報を読み取り、まとめて発表すること

8



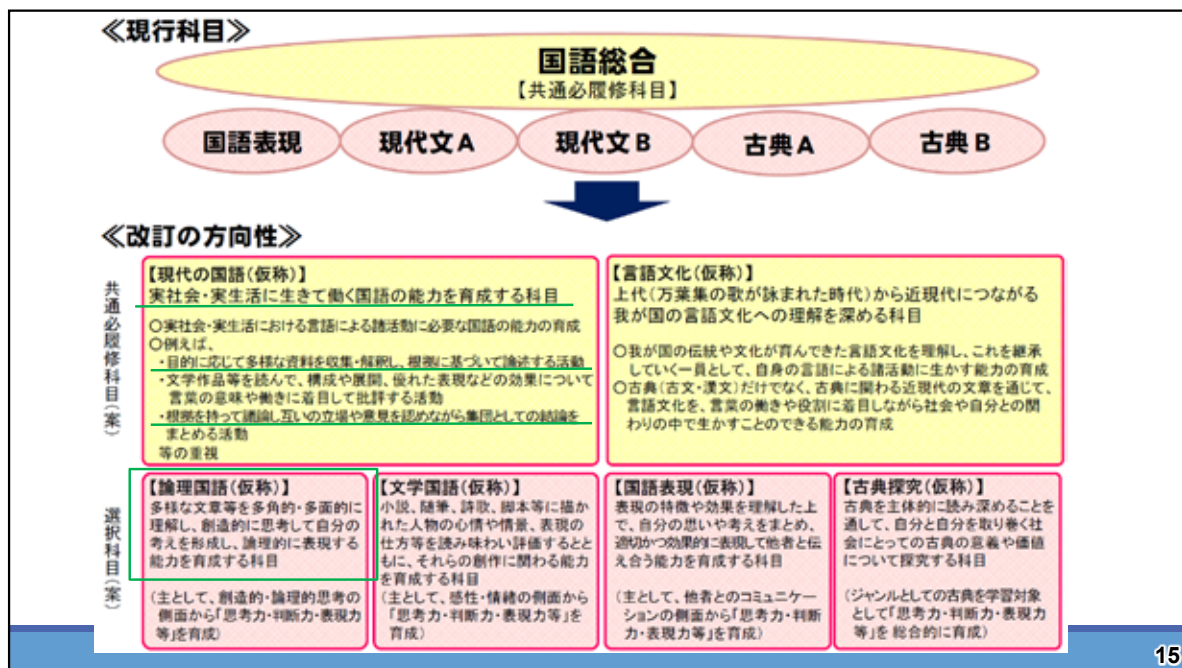




13

国語科において育成を目指す資質・能力の整理			資料2
知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等	
○言葉の働きや役割に関する理解 ○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け ・書き言葉(文字)、話し言葉、言葉の位相(方言、敬語等) ・語、語句、語彙 ・文の成分、文の構成 ・文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係) ○言葉の使い方に関する理解と使い分け ・話し方、書き方、表現の工夫 ・聞き方、読み方、音読・朗読の仕方 ・話し合いの仕方 ○書写に関する知識・技能 ○伝統的な言語文化に関する理解 ○文章の種類に関する理解 ○情報活用に関する知識・技能	国語で理解したり表現したりするための力 【創造的・論理的思考の側面】 ➢情報を多面的・多角的に精査し構造化する力 ・推論及び既知知識・経験による内容の補足、精緻化 ・論理(情報と情報の関係性:共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)の吟味・構築 ・妥当性、信頼性等の吟味 ➢構成・表現形式を評価する力 【感性・情緒の側面】 ➢言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 ➢構成・表現形式を評価する力 【他者とのコミュニケーションの側面】 ➢言葉を通じて伝え合う力 ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解 ・自分の意思や主張の伝達 ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り ➢構成・表現形式を評価する力 【考えの形成・深化】 ➢考えを形成し深める力(個人または集団として) ・情報を編集・操作する力 ・新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力	・言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度 ・言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団としての考えを発展・深化させようとする態度 ・様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通して、心を豊かにしようとする態度 ・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度 ・我が国の言語文化を享受し、生活や社会の中で活用し、継承・発展させようとする態度 ・自ら進んで読書をし、本の世界を想像したり味わったりするとともに、読書を通して様々な世界に触れ、これを疑似的に体験したり知識を獲得したり新しい考えに出会ったりするなどして、人生を豊かにしようとする態度	

14



共通テスト記述式問題の枠組み（１）

【評価すべき能力・問題類型等】

多様な文章や図表などをもとに、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめたり、その過程や結果について、相手が正確に理解できるよう根拠に基づいて論述したりする思考力・判断力・表現力を評価する。

設問において一定の条件を設定し、それを踏まえ結論や結論に至るプロセス等を解答させる条件付記述式とし、特に「論理（情報と情報の関係性）の吟味・構築」や「情報を編集して文章にまとめること」に関わる能力の評価を重視する。

「大学入学共通テスト実施方針」（2017.07）

共通テスト記述式問題の枠組み（２）

【評価すべき能力と問題の形式】

○…国語の問題として解答させる内容としては、以下の４種類に大別

① テキストの部分的な内容を把握・理解して解答する問題

② テキストの全体的な精査・解釈によって解答する問題

③ テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答する問題

④ テキストの全体的な精査・解釈を踏まえ、自分の考えと統合・構造化して解答する問題

○…共通テストの国語の記述式においては、「②テキストの全体的な精査・解釈によって解答する問題」だけでなく、「③テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答する問題」を条件付記述式として出題することを想定している。

17

解答させる内容（問題の例）

② テキストの全体的な精査・解釈によって解答

- * テキストにおける筆者の主張とその主張の理由・根拠を説明する
- * テキストに表現された事物について、目的・場面・文脈・状況等を説明する
- * テキストの会話や表現等に着目して、登場人物の心情の変化等を説明する
- * テキストを通じて対比されている事項について考察し、共通点や相違点について説明する
- * 目的に応じてテキスト全体を要約し、論旨に沿って説明する

③ テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答

- * テキスト全体の論旨を把握し、推論による内容の補足をして、筆者の主張について論じる
- * テキスト全体の論旨を把握し、既有知識や経験による内容の精緻化を行って論じる
- * テキスト全体の論旨を把握し、目的に応じて必要な情報を付加、統合して比較したり、関連づけたりして論じる
- * 複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論じる

18

「大学入学共通テスト（仮称）記述式問題のモデル問題例」（平成29年5月）より

Ⅱ 記述式問題のモデル問題例と評価することをねらいとする能力について（国語）

問2

【解答させる内容（問題の例）と資質・能力、出題形式との関係について（素案）】

③テキストの精査・解釈に基づく考えの形成

複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論じる。

問3

【解答させる内容（問題の例）と資質・能力、出題形式との関係について（素案）】

③テキストの精査・解釈に基づく考えの形成

テキスト全体の論旨を把握し、条件として示された目的等に応じて必要な情報を付加、統合して比較したり、関連づけたりして論じる。

19

大学入試改革をめぐる議論における 論理的思考力重視の流れ

新テストの作問イメージ例
（平成27年12月）

平成23年：「特定の課題に関する調査（論理的思考）」（国立教育政策研究所）

平成24年：「大学改革実行プラン」（文部科学省）

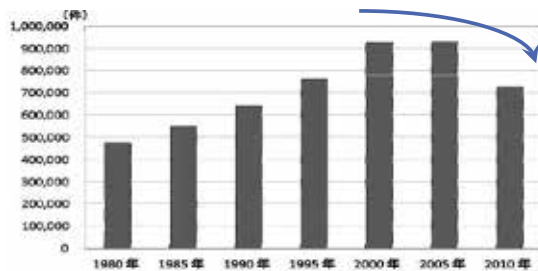
平成25年：「教育振興基本計画」（閣議決定）

平成25年：「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」
（教育再生実行会議・第4次提言）

平成26年：「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、
大学入学者選抜の一体的改革について」（中教審答申）

平成28年：「最終報告」（高大接続システム改革会議）

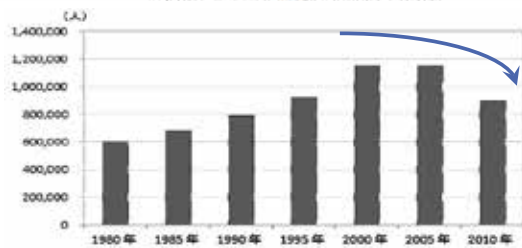
20



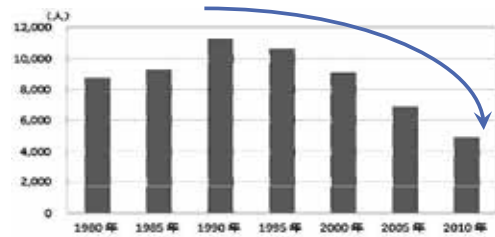
グラフ1：交通事故の発生件数

①交通事故死者数が、負傷者数より早く減り始めているのはなぜか、仮説を立てよ。

②その仮説が正しいことを証明するためにどのようなデータが必要か。



グラフ2：交通事故の負傷者数



グラフ3：交通事故の死者数

21

まとめ

- 国語教育の課題
 - 「読むこと」偏重
- 育てるべき資質・能力の明確化と教育課程の改訂
 - 「論じる力」重視の方向性
- 大学入試改革
 - 国語教育改革を進めるひとつの鍵

22

講演3 アカデミック・ライティング指導／

支援から見る，大学生の言葉と思考

早稲田大学国際学術院

佐渡島 紗織 教授

司会者 杉本 和弘 教授

(東北大学高度教養教育・学生支援機構)

では，ここからは東北大学の杉本が務めさせていただきます。最後のご講演者でいらっしゃいます佐渡島紗織先生をご紹介申し上げます。お手元のプログラムの10ページに情報がございますので，そちらをご覧くださいと思います。佐渡島先生は現在早稲田大学国際学術院教授でいらっしゃいます。ここにもあります通り，イリノイ大学大学院でPh.D.を取得された後，国立国語研究所を経て2002年から早稲田大学にお勤めでございます。ご専門は国語教育，特に文章作成の指導と評価というところでございまして，本日のテーマであります言語，「書く」ということについての研究者でいらっしゃるのと同時に，特に大学におけるライティング指導支援の実践者でもいらっしゃいます。この説明の中にもあります通り，書くことや文章作法に関する著書を多数出されておられまして，小中学校の国語の教科書の編集にも携わっていらっしゃいます。大学関係者の間ではよく知られているかなと思いますけれども，早稲田大学には



杉本 和弘 教授



佐渡島 紗織 教授

学生の書く力を支援する，そして，自立した書き手を育てるための組織としまして，ライティング・センターが設置されております。佐渡島先生は，2004年からその運営に当たられて，現在はディレクター，つまりセンター長をお務めでございます。先ほどの島田先生の高校での国語教育のお話にも，今日はつながるお話かなと思いますが，「アカデミック・ライティング指導／支援から見る，大学生の言葉と思考」というタイトルでお話をいただきます。先生の豊富なご経験を踏まえて，現代大学生の書く力をどう考えればいいのか，あるいは現場でどういふうに支え育てていけばいいのかについて，ご講演をいただきます。それでは佐渡島先生，どうぞよろしくお願いいたします。

佐渡島 紗織 教授

皆さんこんにちは，佐渡島です。よろしくお願いいたします。セミナーの趣旨書を送っていただきましたら，このようなことが書いてありました。「デジタルネイティブの学生たちは，言語をどのように操り，学んでいくことになるので

しょうか。」。本当にそうだなと思いました。私の考え、結論をまず1枚目で申し上げると、私はどんなに進んだIT社会になっても、やはり大学の役割というのは、学生にたくさん読ませてたくさん書かせて、しっかり考えさせることなんじゃないかと、そういうふうに思います。今日は、日々私が苦闘していることを皆さんと共有したいと思います。

初めに、学生にどうやったら考えさせられるかという文章作成指導についてお話しします。「指導」の方は、成績を付ける授業のつもりで書きました。次に、どうしたら学生により考えさせられるかという、文章作成支援ですね。「支援」というのは、先ほどご紹介くださいましたライティング・センターの支援、成績を付けない方ですね、単位を付与しない方についてお話をしたいと思います。

考えさせる作文課題

まず、学生に考えさせる文章作成指導、アカデミック・ライティング指導です。作文の授業をやっているとして、作文の課題を出すわけなんですけれども、8週授業の第1週でテーマだけを与えてみました。『小学生にスマートフォンを与えることに、賛成か反対か論じなさい。』という課題です。そうしましたら、8割方の学生さんが、「インターネットに潜む危険を知らないで、リスクがあるので反対。」というふうに書いていました。どんなリスクがあるかというと、「トラブルに巻き込まれる」、「いじめに加担する」、「親が監督できない」、「善悪の判断基準が難しい年頃だ」と、そんなことが書いてありました。賛成は2割で、大体の学生が「インターネットに慣れるためによい」、「防犯によい」という意見でした。これは、先ほどの酒井先生の電子書籍のお話の中にもあったんですけれども、ここに書いてあるこの意見は全部、インターネットを見ればすぐに出てきます。なので、恐らくバーッとインターネットを見て、この意見にしようということで学生は書

いたんじゃないかなと推測されます。インタビューをしていないので、実態は分かりませんけれども。

それで、同じ学生さんたちに、第7週目になって、今度は参考文献を与えて、引用させながら論じさせてみました。『小学生にスマートフォンを与えることに賛成か反対か、指定された参考文献をひとつ、またはふたつ使って論ぜよ。』というふうにしてみました。この参考文献は、私と教員ふたりが創作しています。ちょっと字が小さくて見にくいので、緑字のところだけをざっと読むんですけども、これは画家の山中童心さんという人が書いた新聞記事を想定して創作してあります。子どもというのは大人にない、純粋な心を持っている。ごみ置き場から棒等を拾ってきて、基地を作った経験があった。友だちとどういう材料を使うかっていうことで喧嘩になったけれども、仲直りをしたとか、秘密基地の周りには虫がいっぱいいて、何を食べて、どういうふうに死んでいくかが分かった。手でつかむと嫌な匂いを出すことも分かった。塀の上からジャンプするという遊びは友だちの中で流行った。こういう遊び、経験が大事なので、電車の中でスマートフォンばかりいじっている子どもを見ると悲しくなる、という記事なんですね。

もうひとつの参考文献は、電気会社の人によるスマートフォンのある生活がよいという宣伝の文章です。大きな公園で子どもが迷子になった時に、親がGPS機能を使って子どもが持つスマートフォンで場所を突き止めて無事に発見したという例があったとか、小学生がルートを検索しながら電車を乗り換えて、一人で愛知県に住むおばあちゃんの家まで行けたとか、いう話です。それから、ある小学生は塾に全く行かないで一日中アプリで勉強したので成績が上がったとか、友だちがいなくても自分のペースで遊べるとか、だから、スマートフォンをどんどん買って与えてあげてくださいという、こういう文章なんですね。

同じ学生さんたちに、今度は参考文献の使用を強要して書かせたわけです。Sさんという学生は参考文献がない時には反対だったんですね。小学生には十分なネットリテラシーが備わっていない、犯罪に巻き込まれるリスクがある、いじめにも加担してしまうかもしれないというふうに書いて反対していたんですけれども、今度は引用しました。さっきの公園のGPSの機能のところを引用して、「小学生にスマートフォンを与えることにはリスクも伴うが、利益を享受できる面の方が大きい。よって私は小学生にスマートフォンを与えることに賛成である。」というふうに、意見を変えていました。もうひとりの意見を変えている学生さんはTさんです。参考文献なしの時には、賛成でした。親との連絡手段となる、情報を得る力は大事だって書いてあったんですけれども、先ほどの子どもが大人にはない純粋な心を持っているところを引用して、「山中は子どもは大人とは違った純粋な存在だと述べている。子どもたちは、子どもたちの自由な世界で自由に過ごす権利を持つ。我々大人が子どもたちの世界に踏み入ってはいけない。我々は自由な子どもたちの世界を外から傍観するだけにとどめなければいけない」。「だから、反対する。」というふうに書いていました。

これは本当によく考えたから賛成が反対、反対が賛成になったかどうかは分かりません。本人にインタビューをしていないからです。しかし、テーマを与えるだけではなく、少なくとも素材を与えて素材から引用して論じさせることによって、情報を拾って並べるだけではなく、そこから何が言えるのかっていうことの解釈・評価を書き手として考えてくれるだろうという、そういう期待があります。それで、なるべく参考文献を与えて引用させるような作文課題の方がいいのかな、と思っているところです。

意見を構築させるための作文技能

先ほど嶋内先生が、日本人の子ども・学生は

意見を持っていないということをおっしゃっていたんですけれども、私も意見を構築させるためにはどうしたらいいか、それを作文指導を通してするにはどうしたらいいかということも考えています。

ひとつ、作文技能について言えることなんですけれども、「私は何々と考える。」っていうふうによく書くんですね、学生は、「私は何々と思う。」「何々ではないだろうか。」とかですね。その論じ方を、「私は何々と考える。」というところを取って、その論じている中身を主語にした文に書き換えなさいというふうに指導をしています。例えば、「私は車両ごとに特定の人しか入れないようにすることで、他の人が入れなくなり、抑止力につながると考える」。これは電車の中で優先席が機能しているかどうかという話題だったんですけれども、それを「私は考える。」を外して、「車両ごとに特定の人しか入れないようにすることは、抑止力につながる。」というふうに、考えた対象で論じるというふうにすると、もう少し緻密な思考になっていくのではないかと期待するわけです。

もうひとつの作文技能なんですけれども、なるべく接続表現を用いて、論の展開を自分で自覚できるようにさせています。例えばこれだと、「車両ごとに特定の人しか入れないようにすることは、他の人が入れなくなり抑止力につながる」なんですけれども、3つの文に分けることができます。「車両ごとに特定の人しか入れないようにする」。「すると」、という順接の接続表現を使って、「他の人が入れなくなる。」「つまり」、これは置き換えですね、「つまり、抑止力につながる。」というふうに、同じことを接続表現を使わせることによって、自分がその文で何を言いたくて、その次の文とどういう関係にあるかという、メタ的な思考が働きます。その自覚を促すことを心がけています。

それから、意味のあいまいな語句をなるべく具体的に書きなさいという指導をしています。これですと、「車両ごとに特定の人しか入れな

いようにすることは」とあるんですけれども、例えば「こと」。「こと」はババ抜きのババと同じですね。何にでも置き換えられるんですけれども、これは具体的に言ったら何ですかというと、「方法」とか「方策」とかあると思うんですね。ルールとか。そういうふう置き換えることで、もっと思考が緻密になるという指導を心がけています。

申し訳ありません、後から少し足しましたので、配った方の資料にないのがあるかもしれません。すみませんが、そちらのスクリーンをご覧ください。こういうふうになるべく考えさせる、思考を活性化させるような文章作成の授業を心がけています。この授業は基盤教育の授業で、履修者は、早稲田は多いので年間4,500人ぐらい取るんですけれども、全く教室には集まらないオンデマンド授業です。8週間1単位の授業で、こういう画面でやっています。ただし、こういう技能授業は、理解しただけでは身に付きませんので、右側にある1枚1枚の作文に、大学院生に訓練を施しコメントを付けてもらっています。この黒い字のところが学生さんが自分で書いた文章で、この文章についてコメントも書いてもらいます。そのことについて、吹き出しのワード機能を使って、大学院生がよく書けているか、まだ考えが足りないかということのコメントを書いて、そしてあらかじめ決められた採点表を使って、ここで得点を出しています。これを8週間連続やるという授業をやっています。

早稲田大学ライティング・センター

一方で、文章作成支援を行っています。こちら早稲田生は多いんですけれどもなるべく一対一対応で面倒を見てあげようということで、ライティング・センターを作りました。これ時計台で、あまりいいニュースの時に出不い景色なんですけれども、ライティング・センターはこのビルの2階の右側半分を使っています。最初はすごく小さい部屋で始めたんですが、

だんだん大学が大きいところを与えてくれました。一対一で文章作成支援をこんなふうにしてやるんですけれども、どうしても授業では原理・原則を教えることが中心になりますので、ここでは一人ひとりの主張したい内容に応じて文章を検討するということをしています。何回でも訪れることができるし、45分間で無料で、一応予約制でやっています。ライティング・センターはアメリカでスタートしたんですけれども、こういうオープンスペース、レストランみたいになっているところが多いんですが、日本人は書いた文章を途中で人に見せる習慣がないので、ブースの方が喜ばれるんですね。また、ここにライティングの本がたくさんあって、待合で待っていてももらう間に読んでもらったりしています。

これはチューター、やはり訓練して30人ぐらいいます。英語文章と日本語文章の両方を見ます。チューターたちが、自分たちの勉強のために自分のポートフォリオを持っていたり、それから録音したテープ、セッションを録音してそれを文字化原稿したものをみんなで貯めて、研修に使っているものですね、それがここに入っています。あとはチューター同士の交流がとても大事なので、この戸棚は特注で作ってもらって、マグカップが100個入るんですけれども、みんなでここで雑談してくださいっていうような部屋も作ってもらいました。

ライティング・センターの指導理念

ライティング・センターは、日本では最近とても増えてきたんですけれども、アメリカで1950年代にスタートしました。ちょっとその指導理念についてお話しします。ひとつ目の理念は、《Writing as a Process》というもので、書くことは過程で指導するのがよいという考え方で、最終稿に至る過程が大事。だからどの段階で訪れてもよい。まだ1行も書いていなくても、もうライティングは始まっている。一緒にその時はブ레인・ストーミングを行う。同じ課題

を何回も持ってきてもよくて、何度も書き直すことが有効であるという考え方です。

私が博士をやらせてもらった時は、アメリカで1990年代だったんですけれども、インターネットがなかった頃ですね。Writingの研究者は、みんな「ごみ箱をあさって」いたんです。それはどういうことかということ、書き手が考えているのは書いている途中であって、最終稿ではないと。その考えている過程が分かるのが、これは駄目って言って捨てた、ごみ箱に捨てた方の紙、それを拾って研究しているっていう人が、結構本当にいたんですね。それが、アメリカで一時期すごく流行りました。Writing as a Process, 国語教育の運動にまでなったぐらいなんですね。

ふたつ目の理念は、《Writing Across the Curriculum》というもので、領域を横断して書くことを支援しようという動きです。これは、専門領域を超えて、ライティングには共通する問題がある。だから、ライティングは独立した一領域であるという考え方です。そうしますと、チューターは専門領域に精通している必要はない。書かれ方を診断するプロなんだからチューターは一読者としての助言を与えればよいと、こういうふうになります。

みつつ目の理念は、《自立した書き手を育てる》というものです。紙を直すのではなくて、書き手を育てようという指導理念です。つまり、書き手がひとりになった時にも、自分で文章の診断と修正ができることを目指します。ですから添削はしない。代わりに書かない。翻訳もしないということになります。

添削指導の功罪

よく私に学内で先生たちが話しかけてくるんです。「先生、私は徹夜で卒論の赤入れをしているのに、学生はちっとも書けるようにならないんですよ。」っておっしゃるんですね。これは、どこがまずいかを特定しているのは、その先生なんですよ。それから、どう直すとよくなる

かということを考えているのもその先生なので、どんどん文章の力を、文章作成力を付けているのは先生自身なわけですね。

私たちの仕事は、学生がどこがまずいかを自分で特定できるようにしなければならないわけですし、どう直すとよくなるかを自分で考える力を育てることだということになるわけです。ですから、ライティング・センターでは、まず、どこがまずいと感じているかを言わせる。どこで苦労しているかっていうことを言わせる。それから、どう直すといいかということと一緒に考えるということをしします。これをするためには、対話を行って、書き手の意図、書きたいことに沿って、一緒に修正をすることが重要になってきます。つまり、添削はしないということになります。

自立した書き手を育てる対話

ちょっと実際の例を見ましょう。これは私が創作した例ですけども、ひとつ会話を見ます。W君がレポートの下書きを持参しました。「どうも文章の構成がしっかりこなくて…。」と言っています。チューターが、「では、読んでください。」と言って、「日本の大学が今後国際化していくためには、3つの点において改革が必要である。1点目は何々、2点目は何々、3点目は何々。」。それでチューターが、「3つ改革案を考えたんですね。ひとつひとつについて、説明していただけますか。」。それで、W君がひとつひとつ説明しているうちに、「あれ、3点目は2点目の補足ですね。改革案は3つではなくて、2つでした。構成を変えます。」と言ったとします。これは、非常に理想的な対話で、全部のセッションがこんなふうにうまく行くとは限らないんですけども、ここで見ていただくと、チューターは「読んでください。」と、「説明してください。」としか言っていないんですね。でも、どこがまずいか特定しているのは本人だし、どうやって修正するかっていうことも本人が気が付いています。こういうふう

に、書き手に気付かせていくことが重要だということで、対話の練習をチューターたちはしています。

それから、留学生が多いという話もありましたけれども、留学生は大抵、第2か第3言語で書いていますね。日本語文章であっても英語文章であっても、外国語で書いている人は、「ネイティブチェックをお願いします。」とか、「文法チェックをお願いします。」とか、「あらかじめ文章を読んでおいてほしいんだけど。」というふうな要望を必ず言うんですね。こういう要望があっても、一応文章の問題点を本人に言わせるようにし、どうしても文法などは、教えてあげないと分からないこともあるので教えるんですけれども、その時には必ず複数の修正案を提示します。そして本人に複数持って帰らせて、どっちにしようかなと一応家でも考えてもらうようにします。あるいは、調べた結果を教えるのではなく、一緒に調べる、調べ方を勉強するというようなことをしています。

もうひとつ私たちが一生懸命練習していることは、気付きを促すための書き込み作業です。例えば、主張がはっきりしない文章というのが一杯持ち込まれるんですけれども、「あなたが最も言いたいと思ったことに、文に二重線を引いてみてください。これは本当に一番言いたかったことですか。」っていうふうに聞くんですね。それから論が途中でずれていくレポートっていうのがよく来るんですけれども、「自分の文章の目的・問いが書かれた文に下線を引いてください。」あるいは「結論・答えが書かれた文に下線を引いてください。」「じゃあ下線部ふたつを続けて読んでください。ぴったりいますか。」というふうに、本人に診断してもらう。それから、キーワードがぶれている文章もよくあるんですけれども、「キーワードと同様の意味で使った語句を、マーカーで全部ハイライトしてください。」と言います。そして、「使い分けているんですか、それとも単にぶれているだけなんですか。」というふうにして、自分

で気が付いていけるような診断方法を教えるわけです。これは結構難しくて、ライティング・センターの支援によい会話ができるようになるには、なかなか時間がかかるんですね。教え込む方がずっと簡単なんです。

ですから、毎週チューターたち全員で90分間のワークショップを開いて、自分たちで練習しています。それから、セッションを音声データで取って、先輩チューターの対話を新しいチューターには聞いてもらっています。そしてそれを文字化して、大学が少しお金を出してくれるので、1学期間に1本、文字化原稿を作ってもらえるんですけれども、それを分析して振り返りをしてもらったりしています。こんなことをして、一生懸命考えさせる。なるべく学生に考える力を付ける文章作成指導と支援をしています。

ざっとまとめますと、文章作成課題で、参考文献を与えて引用をさせる。書く対象を主語にして緻密に考えさせる。論理展開を自覚させる。具体的な語句で論じさせる。文章診断が自力でできるようにする。また修正方法も自分で考えることができるようにする。そして、そのために院生を育成して、文章指導や支援ができるようにするというに取り組んでいます。まだまだ、色んな不十分なことがあって、日々みんな考えて改良していくようにしているんですけれども、皆さま方からもし、何かアイディアがありましたら教えていただければと思っています。ありがとうございました。

司会（杉本）

佐渡島先生には、自立した書き手の育て方という意味で、極めて具体的な事例に基づいてお話をいただきましたので、今日からでも使えるような部分がたくさんあったかなというふうに思います。それでは、フロアから2、3はご質問が受けられそうなんですが、いかがでしょうか。

フロア

どうも、貴重なご講演をありがとうございます。東北大のタシロと申しますけれども、1点だけ確認させてください。ネイティブっていう言葉が出てきたんですが、実際には何ヶ国語ぐらいでライティングの指導が受けられるかというのをお聞きしたかったです。

佐渡島教授

はい。持ってこられる文章は、英語か日本語なんですけれども、チューターのその時に集まっている留学生によって、その文章を検討する言語は、日本語だったり英語だったり、タイ語だったり中国語だったり、その時のチューターのいる構成メンバーで予約画面を作っています。

フロア

どうもありがとうございます。

佐渡島教授

中国の留学生が多いので、中国語で検討するセッションはなかなか人気があります。

フロア

その、いわゆるインタビューとかやり取りの言語が、ということですか。

佐渡島教授

そうですね、検討する文章は日本語だったり英語だったりするんですけども、やり取りを、はい。

フロア

ありがとうございました。

司会（杉本）

よろしいですか。ではこちらの方、お願いいたします。

フロア

はい、東北大学のヨネザワと申します。貴重なお話をありがとうございました。書き手の自立という、発表の趣旨とちょっと異なってしまう質問になるかもしれませんが。書き手の自立の前に、それを支援するチューターの方に興味を湧いてしまいまして、さっきのご質問と似てくると思うんですけども、こちらの集合写真を見る限り27人ぐらいの方が写ってらっしゃって、パッと見るところ、国籍も多様です。先ほど中国やタイ等の留学生もお聞きしたんですけども、まず1点目にかなり、毎週90分自主ワークショップを行うですとか、そしてそれを指導する方へ持っていくということで、かなりチューター自身にとっても負荷がかかるような作業だと思うんですけども、彼らがチューターになるため、そのモチベーションが何なのかということをお教えてください。また、チューターになるまでにどれくらいの期間を要するのとか、どのくらいの期間、そのチューターとして務めているんだろうとか、あとはその先ほどのお話の中でチューター同士の交流が大事とおっしゃっていましたがけれども、その理由についても聞かせいただければと思います。

佐渡島教授

ライティング・センターがスタートして、15年経ちます。一番最初はチューターが10人以下しかなくて、書き手さんが来ない時間にみんなでテーブルで集まって、「ねえ、さっきの文章こんなんだったんだけど、あなただったらどうやって支援する。」っていう、お喋りをしていたんです。そのうちに、「私だったらこういうふうに診断するわ、この文章は。」とか、「こういう書き手が来た時にこうしたらいいんじゃない。」とかっていう、色んなノウハウの交換がなされるようになりました。こうした情報交換がすごくチューター同士の研鑽にいいなと思っていました。それが細分化されて、毎週ひとつずつのテーマでみんなでワークショップをしょ

うということになったんですね。それで、例えばセッションの最初に5分間で書き手と話し合っこの45分間で何をするのかを決めようと。じゃあ、最初の5分間の練習を今日はしようとか。それからすごくまだ日本語ができなくて、ほとんど説明ができない人が来た時にはどうしたらいいとか。そういう時には身振り手振りでやるんだとか、絵を描くんだとかって、色んなノウハウをみんなで出し合ってきました。そうやって、10年間で色々蓄積されてきて、ワークショップのテーマが決まってきたわけなんですね。それに基づいてやっています。チューターたちはこれを繰り返していくと、自分たちが、自分の文章指導力が上がるんですけども、自然と自分の文章力も上がっていきます。そして、博士課程の院生たちはみんな、大学の先生になりたいわけですけども、一生、人の論文を見ていくわけですよ。ですから、もうその時の文章診断力が付くので、将来に向け

て、どの分野の院生であっても、みんなバラバラの研究科から集まっているんですけども、それは将来に資するわけですね。あるいは会社に勤めても、「あなたの文章はなかなか分かりやすい。」というふうに上司から褒められたって、チューターを卒業した人たちなんかは言われているみたいです。この部屋に集まって、そういう議論をしたり、チューター研修をしたりするのも、サブゼミのような感じになっています。そんなモチベーションですかね。それで答えになりましたでしょうか。

司会（杉本）

はい、ちょっとお時間になってしまっておりますので、この辺りで終わらせていただいて、次のディスカッションで質問をいただければと思います。佐渡島先生、改めましてありがとうございました。

平成29年度IDE大学セミナー
IDE大学協会東北支部
大学生と言語—変容する思索と文化の礎—
2017年11月29日(水)
仙台ガーデンパレス

アカデミック・ライティング指導／支援から見る、大学生の言葉と思考

早稲田大学 国際学術院
佐渡島紗織

1

はじめに

本セミナーの趣旨

「デジタルネイティブの学生たちは言語をどのように操り、学んでいくことになるのでしょうか。」

どんなに進んだIT社会になっても



大学の役割

学生にたくさん読ませ、たくさん書かせ、
しっかり「考え」させる

2

次第

1. 学生に「考え」させる文章作成指導
2. 学生に「考え」させる文章作成支援

3

1. 学生に「考え」させる 文章作成指導

4

「考え」させる文章作成課題

第1週で、テーマだけを与えた

「小学生にスマートフォンを与えることに、賛成か反対か。」(17春)

◆反対 約8割

インターネットに潜む危険を知らないのでリスクがある。
(トラブルに巻き込まれる、いじめに加担する、親が監督できない、善悪の判断基準が難しい)

◆賛成 約2割

インターネットに慣れる。防犯によい。

5

「考え」させる文章作成課題

第7週で、参考文献を与え、引用させながら論じさせた

「小学生にスマートフォンを与えることに、賛成か反対か。指定された参考文献を一つまたは二つ使って論ぜよ。」

6

〈参考文献1〉《関西新聞》、2017年1月20日、夕刊、第2版、5面と6面

子どもにとって大切な経験

画家 山中童心

近頃、街中で子どもを見るたびに思うことがある。そこで、年明け最初の本コラムでは、子どもにとって大切な経験は何かという点について述べたい。

子どもというのは、大人にはない純粋な心を持っている。現在の有用な情報と無用な情報が混在する社会に子ども時代から染まってしまうと、この純粋な心を失ってしまう危険性がある。子どもが純粋な心を持っているうちに、...

私は、子どもの頃、親友と一緒に秘密基地を作った。二人で設計図を描き、街中を歩いて基地作りに使える材料を探し回った。ゴミ置き場から木の板や棒、ビニール紐を拾ってきて、懸命に組み立てた楽しさは忘れられない。しかし、ある時、親友が「基地の中に座る物が必要だ」と言ってゴミ捨て場にあったマットレスを持ってきたが、私が反対して喧嘩になった。数日口をきかずにいたが、雨が降ってマットレスが濡れて使えなくなり、結局仲直りした。そして、近くのお店から段ボールを譲ってもらい、二人で斬新な椅子を作った。このように、友達と一緒に何かをつくる過程で、喧嘩したり仲直りしたりする機会を持つことは大切である。互いに意見を述べる、相手の表情から感情を読み取る、相手の行動を観察して

—新聞の5面—

相手の気持ちを察する、などといった経験を積むことで、...視野も広がるだろう。秘密基地の周りには、ランドファンがびくびく生息していた。捕まえてよく観察することも、何を食べるか、いつ卵を産むか、オスとメスは何か違うかを知ったし、手でつかむと嫌な匂いの液体を出すことも知った。

体を動かす経験も大切だ。公園では、飛んだり走ったり、寝そべったり、手足を動かしたり、普段の生活ではしない動きをたくさんやってみた。特に、塀の上からジャンプするという遊びは、友達の中で流行った。体を使う遊びを通して、自分の体の使い方を知ることができたと、転んで怪我をしても「痛い」という体の感覚を知ることができたと思う。

電車の中でスマートフォンを片手にゲームに没頭する子どもを見かける度に、悲しくなる。子ども時代にしかできない大切な経験を積んでほしいと願うばかりである。

—新聞の6面—

7

〈参考文献2〉関東電気同盟発行、《月刊最先端の光》、2017年、4月号、p.18

スマートフォンがある生活

早稲田電気株式会社

スマートフォンを持つことで、皆さんの生活が一変すると確信しています。

スマートフォンにはGPS機能がついていますので、スマートフォンの持ち主がいる場所をボタン一つで調べることができます。そして、現在地から目的地までの行き方を検索したり、地図を検索したりできますので、道に迷うことがなくなります。先日、本社の会議で、大きな公園で子どもが迷子になった際に、親がGPS機能を使って子どもが持つスマートフォンの場所を突き止め、無事に発見したという例が報告されました。さらに、東京都に住む小学生がルートを検索しながら電車を乗り換え、自分一人の力で、愛知県に住む祖母の家まで行ったという例も報告されました。また、音声通話だけでなく、メール、LINEやTwitterなど様々なコミュニケーションツールを無料で使うことができます。子どもでも簡単に使え、時間帯に関係なく親や友達と連絡を取ることができます。例えば、小学生でも、学校での出来事をLINEで友達に相談したりTwitterで呟いたりできます。

初めて聞いた英単語や読めない漢字が出てきた場合には、手元にあるスマートフォンでインターネット検索すれば...地名や生き物を調べる場合は、写真や動画で、...。最近では、無料でダウンロードできる勉強用アプリもありますので、スマートフォンを持っていれば学ぶ機会が増えます。ある小学生は、塾に行かず、一日中勉強用アプリで勉強して成績が上がったそうです。家で、一人で学べますので、塾や家庭教師はいりません。

そして、スマートフォンがあれば、通勤や通学の移動時間、電車を待つ時間やレストランで並んでいる時間などに、...。オンラインでゲームの対戦相手を探すこともできますので、その場に友達がいなくても自分のペースで遊べます。退屈でイライラするといった時間は減るでしょう。

スマートフォンは皆さんの生活へ良い影響を与えます。まだお持ちでない方は、ぜひ御購入ください。

—同盟誌のp.18—

8

例:Sさん

参考文献なし

反対:小学生には十分なネットリテラシーが備わっていない。犯罪に巻き込まれるリスクがある。いじめにも加担してしまうかもしれない。



参考文献を引用して

先日、本社の会議で、大きな公園で子どもが迷子になった際に、親がGPS機能を使って子どもが持つスマートフォンの場所を突き止め、無事に発見したという例が報告されました。(中略)音声通話だけでなく、メール、LINEやTwitterなど様々なコミュニケーションツールを無料で使うことができます。

小学生にスマートフォンを与えることには、**リスクも伴うが利益を享受できる面の方が大きい**。よって私は小学生にスマートフォンを与えることに**賛成**である。

9

9

例:Tさん

参考文献なし

賛成:親との連絡手段となる。情報を得る力は大切。



参考文献を引用して

子どもというのは、大人にはない純粋な心を持っている。現在の有用な情報と無用な情報が混在する社会に子ども時代から染まってしまうと、この純粋な心を失ってしまう危険性がある。子どもが純粋な心を持っているうちに、大人は子どもにたくさんの経験をさせるべきである。(『関西新聞』2017.1.20夕刊,第2版,5面)

山中は子どもとは大人とは違った純粋な存在だと述べている。**子どもたちは子どもたちの自由な世界で自由に過ごす権利を持つ。我々大人が子どもたちの世界に踏み入ってはいけない。我々は自由な子どもたちの世界を外から傍観するだけにとどめなければならない。...**以上の理由より、小学生のスマートフォン所持に**反対**する。

10

「考え」させる文章作成課題

■テーマだけを与えるのではなく、

素材を与える

素材から引用させて、論じさせる



情報を拾う、並べるだけでなく、
情報から何が言えるかの解釈、評価を
する

11

意見を構築させるための作文技能

■「私は～と考える」ではなく「○○は～である。」と
いう論じ方をさせる

「私は、車両ごとに特定の人しか入れないようにする
ことで、他の人が入れなくなり、抑止力に繋がると
考える。」

⇒「車両ごとに特定の人しか入れないようにするこ
とは、他の人が入れなくなり、抑止力に繋がる。」

12

意見を構築させるための作文技能

■ **接続表現**を用いさせ、論の展開を自覚させる。

「車両ごとに特定の人しか入れないようにすることは、他の人が入れなくなり、抑止力に繋がる。」

⇒「車両ごとに特定の人しか入れないようにする。

すると、他の人が入れなくなる。**つまり**、抑止力に繋がる。」

13

意見を構築させるための作文技能

■ 意味の曖昧な語句を**具体的に**する

「車両ごとに特定の人しか入れないようにする**こと**は、他の人が入れなくなり、抑止力に繋がる。」

⇒「車両ごとに特定の人しか入れないようにする**方法**は、他の人が入れなくなり、抑止力に繋がる。」

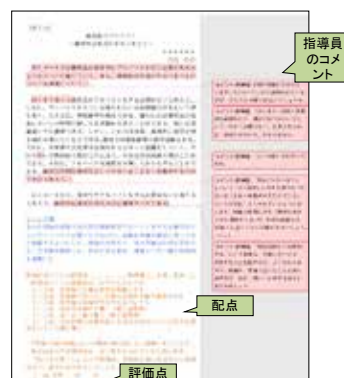
14

「考え」させるための文章作成授業

「学術的文章の作成」授業

…大学基盤教育(履修者、年間約4500人)

オンデマンド授業 8週間1単位



15

2. 学生に「考え」させる文章作成支援

16

早稲田大学ライティング・センター



17

一対一で文章作成を支援する

ライティング授業では原理・原則を教える



一人ひとりの主張したい内容に応じて文章を検討する

何度でも訪れることができる
45分間、予約制



18



19



20

ライティング・センターの指導理念

理念1 Writing as a Process

書くことの「過程」で指導する…ゴミ箱の研究

- 1) 最終稿に至る過程が大切
どの段階で訪れてもよい。構想、下書き、仕上げ
- 2) まだ一行も書いていなくてもライティングは始まっている。
一緒にブレーン・ストーミングを行う。
- 3) 同じ課題を何度持って来てもよい。
何度も書き直すことが有効である。

21

ライティング・センターの指導理念

理念2 Writing Across the Curriculum

領域を横断して書くことを支援する

- 1) 専門領域を超えてライティングには共通する問題がある。従って、ライティングは、独立した一領域である。
- 2) チューターは専門領域に精通している必要はない。
〈書かれ方〉を診断するプロである。チューターは一読者としての助言を与える。

22

ライティング・センターの指導理念

理念3 自立した書き手を育てる

「紙を直す」のではなく「書き手を育てる」

- 1) 書き手が独りになったときにも文章の診断と修正ができることを目指す。
- 2) 添削しない。代わりに書かない。翻訳しない。

23

添削指導の功罪

教員「徹夜で卒論の赤入れをしているのに、学生はちっとも書けるようにならない！」

- ◆どこがまずいかを特定している…教員
- ◆どう直すとよくなるかを考えている…教員



学生が どこがまずいかを自分で特定できる
学生が どう直すとよくなるかを自分で考える

24

- ◆どこがまずいと感じているかを言わせる
(苦心している点を言わせる)
- ◆どう直すとよくなるかを一緒に考える



…**対話**を行い、書き手の**意図に沿って一緒に修正**する。添削をしない。

25

自立した書き手を育てる対話 ＝書き手に気づかせる

- W君:** レポートの下書きを持参。
「文章の構成が、しっくり来なくて…」
- チューター:** 「では、読んで下さい。」
- W君:** 「日本の大学が今後、国際化していくためには、
三つの点において改革が必要である。1点目は～、2点目は～、3点目は～。」
- チューター:** 「三つの改革案を考えたのですね、一つひとつについて説明して下さいませんか。」
- W君:** 一つひとつ説明しているうちに、
「あれ、この3点目は、2点目の補足ですね…。
改革案は三つではなく二つでした。構成を変えます。」

26

自立した書き手を育てる

ライティング・センター利用者の要望

「文法チェックをお願いします。」

「ネイティブのチューターにみてもらいたい。」

「予め、文章を読んでおいてほしい。」



文章の問題点を本人に言わせるようにする
複数の修正案を持ち帰らせるようにする
一緒に調べる

27

自立した書き手を育てる

気付きを促す書き込み作業をさせる

◆主張がはっきりしない文章

最も言いたいことが書かれた文に二重線を

◆途中で論がずれていく文章

文章の目的(問い)が書かれた文に下線を

結論(答え)が書かれた文に下線を

下線部二つを続けて読んでください

◆キーワードがぶれている文章

キーワードと、同様の意味で使った語句をハイライト

28

ライティング支援者の研修

毎週90分間の自主ワークショップ

先輩チューターの対話を聴く
セッション対話の振り返り



29

まとめ

「考え」させる文章作成指導と支援

- ✓文章作成課題で、参考文献を与え引用させる。
- ✓書く対象を主語にして、緻密に考えさせる。
- ✓論理展開を自覚させる。
- ✓具体的な語句で論じさせる。
- ✓文章診断が自力できるようにする。
- ✓修正方法を考えることができるようにする。
- ✓院生を育成して文章指導や支援ができるようにする。

30

御清聴ありがとうございました



sadoshima@waseda.jp

討

議

討議

司会者

齋藤 誠 東北学院大学
安藤 晃 東北大学高度教養教育・学生支援機構

司会（齋藤）

司会を仰せつかりました，東北学院大学の齋藤です。

司会（安藤）

同じく，東北大学の安藤でございます。本日，これから討議ということで，少しお時間をいただきまして，4名の先生方に先ほどご講演いただいた内容も踏まえて，進めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

司会（齋藤）

それでは，各先生方の話の各論的なところを掘り下げていきますと，いくらでも話題はあると思いますが，そうしますと時間が足りなくて，しかも議論が色々なところにおよぶということで，まず，今日のテーマとの関わりの中で，各先生方の意見あるいは立場というものを少し明確にしていくという作業をしていきたいと思っています。

今回のテーマの背景には，学生をめぐる言語環境が大きく変わりつつある中で，言語教育，あるいは学生に対する言語との関わり方につい



安藤 晃 教授

での指導，そういったものについてかなり大きな変化が起こっているという状況認識があります。その変化をどう解釈するかという点では，それは危機的な状況であり，かなり根本的な対策の変更をしなければいけないという考え方もあるでしょうし，いや，変化は変化だから，それに対応するような何か新しい考え方を取ればいいんじゃないかという考え方もあるだろうと思います。

そういう点で，今日の先生方に，まず今の状況の変化の大きさというものをどのように捉えているかということと，それはその大学における言語教育，あるいは言語指導において危機的なものとして捉えているのかどうかということ，この二点について，つまり，基本的な状況認識ですね，そのことについて，まず伺いできればと思います。酒井先生から順にお願いできますでしょうか。

酒井教授発言

司会（齋藤）

昔と比べて，顕著に問題が深刻化していると



齋藤 誠 教授

いう認識ですね。嶋内先生、いかがですか。

嶋内助手

そうですね、私が知っている昔というのは、私自身が大学生の頃だった今から15年ぐらい前のお話なんですけれども、私が知っている昔と比べても、非常に学生の言語能力は下がっているなというふうに感じます。というのは、自分が大学生だった頃はまだ昔で言う教養主義みたいなものが残っていたと思うんですね。私は文学部だったんですけれども、大学の授業を聞いていなくても、じゃあニーチェ読んでるとか、カフカ読んでみたい、そういうのを読んでいるのがかっこいいというのがまだちょっと雰囲気としてあった時代だったと思うんですけれども、今の学生にはそういった例えば昔の文学であるとか、流行っている本等も含めて、本とか読みものをまず読まないというのが非常に多くの学生に共通する傾向なのかなと思います。

先ほど講演の中で学生たちの英語の文章を添削するという話をしたと思うんですけれども、私は日本語で書いた文章を、学生のものを讀んだことはないんですが、英語のものだけを讀んでいると、書いている内容が非常に幼稚なんです。どのぐらい幼稚かというと、私が考える幼稚のレベルになるんですけれども、中学生とか小学生が社会科の授業で発表するような内容を、



嶋内 佐絵 助手

を、大学生が英語の文章で書いているんです。それはひとつの理由は英語で書いているから内容が薄くなるというのは当然あると思います。言語能力と思考力っていうのは、ある意味で連動するので、英語で書ける範囲で書いているから、内容が落ちるということは当然あると思います。一方でやはり情報を知らなくて、たくさん読んでいないから書けることがないということもあると思います。

私の授業の中でグローバルコミュニケーションというクラスをやっているんですけれども、そのセッションのひとつで歴史認識というセッションを作って、慰安婦問題について議論をする回があるんですが、例えば慰安婦問題ということ自体についても、学生たちは本当に何も知らないです。ひとつには、高校で日本史が必修ではなかったからやっていないという言い訳もありますし、テレビでやっていてもそもそも新聞も読まないし、ニュースは基本的にLINEのLINE Newsしか読まないということで、全然背景を知らない。ちょっと調べてみてというと、スマホとかでニュースを見るので、主に知る情報がネトウヨの書いている言説なんですね。ですので、言っている内容がとても偏っていて、じゃあ1冊本を読んでくださいと言うと、例えば本屋さんで一番前面に出ている産経新聞の書いた歴史戦の本だけを読んでくる。そういう状況なので、本当にたくさんの文献とか、たくさんの情報に当たって、自分の意見を構築するという習慣がそもそもなくなっている学生がすごく多いのかなというふうに思います。

そういう意味でとても、危機的状況にあるなと私も本当に思っていて、先ほど何かディベートの話がありましたけれども、ディベートというののもちょっと、一歩間違えれば非常に危険性のある方法なのかなというふうに思っています。学生は特にディベートをやると、白か黒か、賛成か反対かというふうに分けて議論をして、そこで色んな訓練をするので、それも確かに論

理的思考の訓練としてはいい方法かもしれないんですけども、大体世の中で起こっているほとんどの問題は、大体白か黒かではっきり、賛成か反対かでは結論付けられない問題がたくさんあって、グレーゾーンのまま話し合うってような能力、能力と言うかそういう言語能力であったりコミュニケーション能力や、自分の意見の構築能力っていうのが非常に欠けているとか、そういうことをする経験を多分していないんだろうなというのはあります。なので、ディベートはできてもディスカッションはできないという学生もいたりするので、そういう意味でも、やっぱり日本での教育の経験の中で本当は得られるべき能力を付けられていない学生が多いのではないかなというような感触を持っています。

司会（斎藤）

はい。ありがとうございます。議論を進める時間配分がありますので、少し短めにお願いします。島田先生いかがですか。

島田教授

はい。私も危機的な状況であると認識をしています。その背景には一体何があるんだろうと考えると、危機的な状況にあるのは大学生の言語状況だけなのかということをもいつも考えます。我々と言いますか、社会人と言いますか、じゃあ大人の言語状況は危機的ではないのかとか、低下していないのか、とかですね。出版業界が不況なのは大学生のせいとか。新聞は相変わらず売れているのか、それとも売れなくなっているのか、それは大学生のせいとか、とかですね。大人の読書量は減っていないのかとか、いろんなことを考えるわけです。そうしますと、国民の、と言っていいかどうか分かりませんが、国民の言語生活が一体どう変わってきているのかということからは、常に気になります。

雪の研究で知られた、ある物理学の泰斗が、戦後間もなく書かれたエッセイにこういう話が



島田 康行 教授

ありました。戦時中、盛岡のある町に急遽泊まることになった。日も暮れて、ようやく侘しげな旅館が見つかったが、急なことで部屋の用意もなく、通されたのは宿の主人の部屋だったんだけれども、その小さな部屋の壁一面が本棚で、岩波文庫や洋書がずらっと並んでいたという話です。こういう国民の言語文化というのが、国の力になっているのではないかと、という感想が書かれていたかと思います。今そのことをちょっと思い出しました。大学生の言語状況は確かに危機的です。しかしそれは、大学生の問題だけでもなかろうと思っているところです。以上です。

司会（斎藤）

はい、ありがとうございます。最後に、佐渡島先生いかがですか。

佐渡島教授

テレビでスループットという言葉聞いたことがあるんですね。情報をインプットする、アウトプットする。最近の学生さんは、インターネットをバーッとスルーしてですね、そこから情報を拾って、パッチワークのように並べて自分の意見を作っちゃうとのことで、すごく危機的だと思います。

一時期、みんなが手をつないで運動会で走るってというのがありましたね。それが批判され

ましたけれども、何か今の学生さんって、みんなと同じがいいっていう、そういう価値観があるような気がします。作文もすごく似ているんですね。書くことがみんな同じなんです、論点。人が考えないような意見を書いてやろうっていう意気込みのあるペーパーがなかなか出てこないっていうのを、すごく寂しく思います。社会全体で情報量が多すぎるんじゃないかと、書かれてある情報が多すぎるんじゃないかと思うんですね。

同意書も、すごいですよね。何をやっても同意書にチェックをしないと、先に進まないじゃないですか。でも、同意書の情報量が多すぎて、あれを全部1行1行読んでいる人なんて絶対いないと思うんです。つまり、ないのと同じなんですよね。それから駅なんかでも、指示が多くて、次はどうしろとか、こういう人はこっちに行きなさいとか、降りる人が全部降りてからどうたらとか、もう情報が多すぎて、誰ももう聞きたくない。結局耳がふさがっちゃって、入ってこない。全体的にこの近代社会は情報をより分けることに、みんなが忙しくなっていて、かえってものを頭で考えなくなっているんじゃないかなっていう感じがします。



佐渡島 紗織 教授

司会（齋藤）

はい、ありがとうございました。皆さん共通の認識を持っていて、非常に危機的であると。

危機的であるから、何とか対応しなければいけないという話に、通常的にはなるのでしょうかけれども、まずその認識に関してですね、私はちょっと違う考えを持っているという方、フロアでおられますか。4人が4人とも同じようなことを言っているけど、基本的に違うんじゃないの、という方はいますか。それでは、それを前提に話を進めていいですか。かなり大きな分岐点ですが、意見が違う方がいらっしゃればフロアから発言をお願いします。

フロア

私、昔は東北大学で教えていました。それで、専門は理論物理ですけども、まあ理論っていうよりは物理学ですけどね。教える段階で、その先生方のお話を伺って、僕は20年前に東北大学に留学生センターっていうのを作ったんです。だから、こと留学生に関しては、その当時は俺に敵うやつはいないというくらい、自信があったんです。文科省の役人連中、留学生課の連中に、こうしろ、ああしろって言ったんですけども、留学するというのを先生はおっしゃったわね。行けばいいっていうことじゃないし、英語を習えばいいっていうことじゃないしね。やっぱり、外国に行くと言ってそれでそこで、その違った文化を習うっていうことね。これが何て言っても留学の最大のメリットですね。だから、行けばそれは自然と語学は習いますよ。しかしその語学というものを、我々の立場、日本のサイドから言えば、教えなくちゃなんないと思っちゃうでしょう。こんなの、体で感じてくりゃいいんです。語学なんて言うのは、文章を書く、ものを考える、その時に何を考えるか。私は基本的には、感性の問題と、理性の問題しか残らないと思う。

とにかく我々人間が行動する時に、何によって行動しているかっていうと、理性で動くか、感性を使うかですね。どっちが何%というのは、分野によって違います。芸術の分野、あれは感性がすこぶる大事ですね。音楽と、絵画ね、そ

れから小説家、この連中ってというのは、感性が非常に大事なんですね。それで、アカデミック・ライティングを教えるという立場ですが、そのお話を伺っていて、じゃあその自分の学生、教えている学生が将来、どういうスタンスというか、どういう立場で文章を書くようになるのかまで考えておられるかどうかなんです。だからジャーナリストにするか、政治家にするか、小説家にするかということによって全然方法が違います。

例えばね、私の時代ですと、僕は阿川弘之なんてよく読みました。しかし、彼は志賀直哉の文章を読んで、彼に師事することによって文章家として大成したわけですよ。だから、そういう物書きの人達ってというのは、先輩がいるんです。だから、いい文章を読ませるということが、いい日本語を書かせるためには、どうしても僕は必要だと思います。確かに今の学生を見ているとね、ドクター論文を書かせたって日本語になっていないですよ。ただし、そこで文系と理系というような、理系というのは起承転結ってというのは必ず決まっているんです。だから文章の構成が、非常に教えやすいんです。ところが文系の場合は、必ずしも起承転結ってというのは揃っていないです。だからどっちから書いても構わないというような文章だってあるわけですよ。しかし、理系の発表する論文ってというのは、起承転結がきちっと決まっていなくてちゃ受け付けられないですからね。だから、そういうことがあるわけなんですね。だから、将来この連中をどうしたいかっていうところまで考えて、それで、その色んな教育を考えなくちゃならないと思います。

まあ話が長くなるからやめますけれども、我々の時代、20年前に僕は退職しましたがけれどもね、その時代と今は、あまりにもハイテクが進みすぎているんですね。スマホを使えば何だって出てきますよ。我々の時代でもパソコンを使っていれば、スマホじゃなかったですけども、色んな論文が出てきましたよ。この論文見たこ

とあるなって言ったら、自分の論文だったってということもしばしばありましたけど。しかしそれは、やっぱり時代の、時代によってそのハイテクさが変わっていますから、それまで考慮して、やはりカリキュラムにしろ、教え方にしろ、それはお考えになるべきだと思います。

最後に一言。私は今でも、東北大学の現役の学生をたくさん集めて、しょっちゅう酒を飲んでいるわけですけども。されど、その学生たちの、今の学生たちの考え方ってというのは、先生方を非常に尊敬し、頼りにしているのは間違いないです。だから今の学生は言うことを聞かないって現役の先生方はおっしゃいますけどね。学生たちがどれだけ先生方を頼りにしているかっていうことを、肝に銘じて、教育に専念してください。以上です。

司会（齋藤）

ありがとうございました。いずれにせよ、何とかしなきゃいけないというご意見ですが、さて、何とかする時に、今日は高校の話も出ましたし、大学の話も出ました。あるいは、社会全体という話も出ましたけれども、どこが肝要なのか、つまり、それについて、少なくとも教育的な働きかけをする時の一番の重要なところは何なのかということ、それからその際に今日の我々の状況認識にあるデジタルネイティブという環境とどう共生していくのか、あるいはそれとどういうふうにつき合っていくのかというその辺の話を4人の先生に一言ずつお願いしたいと思います。酒井先生からお願いします。

酒井教授発言

司会（安藤）

ありがとうございました。ちょっと司会を代わります。次に、ある意味でデジタル世代と真ん中というイメージがございますが、嶋内先生の方から色々のご意見をいただければと思います。よろしくお願いします。

嶋内助手

ありがとうございます。デジタル世代と真ん中でもないんですけれども、私は中学生の頃に、ポケベルが流行った世代です。大学生になって、初めて携帯というものを手にしたんですけれども、今の大学生は本当に小学生の頃から携帯を持っていた、もう中学・高校からスマホを持っているという世代なので、そういう学生たちと接していると、やっぱりジェネレーションギャップというのを感じることがあります。デジタルネイティブの世代、この世代の良い点と言うのは、まず情報へのアクセスがものすごく簡単になったということで、私たちのような上の世代が直面していたような、情報を得るために時間をかけるということがなくなって、その時間がものすごく省略できているというのは、大きなポテンシャルだなと思います。

一方で、活字にはたくさん晒されているんだけれども、長いものが読めないという問題点があって。twitterでも140字でどんどん情報が流れていく。最近流行っているのが、いわゆるキュレーションメディアというもので、まとめサイトですね。何かの情報について、大事なポイントが全部まとまっている。だからそのページさえ読めば全てが分かる。Wikipediaとか多分その典型だと思います。そういったキュレーションサイトというものを学生が使うことで、自分で情報を集めて、そこから大事なものを選別するっていう作業をやらなくなってしまっているんですよね。そういうことを、教育がどうにかできないかというふうに、私は教養科目を教えている人間なので思うんですが。いわゆる情報リテラシーとか、メディアリテラシーとか、もしくは社会調査法なんていうのもひとつの方法だと思うんですけれども、そういう基礎的なものを、情報をどういうふうに判断するか。この社会調査は本当に正しいのか。この情報が正しいのかという、ものを判断する、選別する目というのを、先ほど酒井先生は、そういうことができる人もいるというふうに言っ

たと思うんですが、ほとんどの人はそれがもともとはできないと思います。なので、そういうことを育成する能力というものを、恐らく大学だけではなくて、高校とか中学の頃から、教育の中でやっていくのが必要なのではないかなと思っています。

司会（安藤）

ありがとうございます。いま情報の獲得という話で、お話をいただきましたが、例えばGoogleで検索した時も、そこでヒットする上位のサイトしか見ないという、ある意味では、情報の選択がそこで行われていたりするというのも、ひとつの問題かと思います。それでは次に、島田先生の方からよろしくお願いします。

島田教授

デジタルネイティブという人たちが本当にいるとすれば、それがどういう人たちなのかということをよく知るといふ辺りから始めないといけないのかなと思います。「この人たちがそうなんだ」と言われれば、じゃあそれは、そうじゃない人たちとどう違うのかなというところを、まずしっかりと見て行かないと、共に生きていくこともできないのかなと感じました。確かに、これからの国語科では情報を編集したり、操作したりする力というようなものを重視していこう、育成する力として重視していこうというふうに掲げていますけれども、それもそのデジタルな情報とそうでないような情報とはどう違うのか、それぞれをどう取り上げて扱っていったらいいのかというようなことをよく考えるとところから始めないといけない。誰にも経験がないわけですので、それがどういうものなのかということをよく知るといふところからでないと始まらないのかなと思います。

司会（安藤）

ありがとうございます。それでは佐渡島先生の方からも、一言お願いします。

佐渡島教授

情報に流されないで、じっくり考える学生を育てるにはどうしたらいいかということでしたでしょうか？

司会（斎藤）

今の状況がかなり危機的だとして、それを変えるには、一番の肝、ポイントはどこになるだろうかというのが1問目。2問目は、その際デジタルネイティブの今の子たちの環境と、どう共生していくのかとか、あるいはどう利用していったらいいのかということについてのご意見をお願いします。

佐渡島教授

読書が減っているという問題なんですけれども、読書っていうのは疑似体験なわけですよ。それで今の学生さんは、日本は豊かですけども、体験、経験が本当に豊かかどうかというところがまず、背景にあると思うんですね。クリエイティブについてですが、さっき酒井先生がクリエイティブなものを生み出すためにはとおっしゃったんですけども、豊かな発想というか、クリエイティブさっていうのはどこから来るのかなって思うんです。

子どもの時にたくさん遊んでいる学生、思う存分遊んでいる学生って、結構クリエイティブだと思うんですね。読書も遊びって疑似体験もすごく多いと思うんですけども、読書と遊び。この辺りが何かポイントになることのひとつかなということを思います。それから具体的な方策なんですけれども、共生のための方策ですね。私は作文指導が専門なので、これから中心にしていこうと思うことは、引用です。情報をただ取って並べ替えるだけではなくて、そこから何が言えるのかを解釈、評価する力を養っていく。どんな情報も自分なりに評価して、自分がそれについてどう思うか。そして自分を構築していく、意見を構築していくっていう、そういう訓練を大学時代にしたらいいのかなと思っ

ていますけれども、皆さんいかがでしょうか。

司会（斎藤）

今のことにに関して言うと、情報を例えばインターネットでいくらでも検索できるということです。問題はそれをどういうふうにも再構成したり、解釈したり、あるいは自分の意見で論評したりするのかという、そういう能力を身に付けることであるというのであれば、むしろインターネットを使った教材で、教育をするっていうことの方がより実践的のような気がするのですけれども、そういう点はいかがでしょう。佐渡島先生。

佐渡島教授

そうですね。そういうわけで、先ほどその参考文献を引いて、そこから何と何の情報を引いていって、自分の意見を書くか、結論を導き出すかっていうその論理的なところ。そこを鍛えたいなと、私は自分の分野では思います。あとはディスカッションですね。今の学生さんたちは、みんな人懐っこいので、そして少人数教育も各大学工夫を凝らしているので、話合わせる。いっぱいお互いに批評しあって、生産的なディスカッションをさせるっていうことは、結構大事じゃないかと思っています。

司会（斎藤）

島田先生、高校の国語教育ではそういうデジタルリソースを使った授業の進め方なんていうのは研究されているんでしょうか。

島田教授

試みとしてはたくさんあると思います。たとえばハイパーリンクが張り巡らされているようなタブレット版のデジタル教科書などの開発も進んでいます。いつ実用化されるのかという辺りは、まだちょっと分からないですけども、確かにそういうものの開発というのは進んでいます。

司会（安藤）

ちょっと変わりました、先ほどのディスカッション、いわゆるディベートじゃなくてディスカッションをちゃんとやっていくという中で、批判的な考え方とか、他とは違う論点を出すという訓練は必要だというご意見がありました。しかし、今の中等教育や初等教育では、色々な意味で、彼らは先ほどからお話がありましたように、仲良しだと。いわゆる敵を作らないというような、ある意味ではコミュ力が強いという言い方もあるかもしれませんが、そういった環境の中で、いわゆる議論とか共同生活をしてきているわけですね。大学に入って、その考え方の転換って言うんですか、これから社会に出ていく時のための発想の変化というものがそこで求められていると思います。

ただ単に1年生を集めて、皆さんで話をしましょうという、常に相手の考えを慮ったところからスタートしてしまって、突出した意見も出しにくいし、また例えば先ほどのインターネットで検索をしていくと、大勢を占める意見は何だろうかというところも、結構気にしながら自分の意見をまとめようとしています。いわゆる、そつのない答案を作ろうという傾向も結構あるかと思うのですが、そういったものをある意味では打破しなければいけないし、いいところではあると思うのですが、ある意味ではそれを変えていかなければいけないというところも大事なところかと思っています。それについてはいかがですか。島田先生、さっきの続きと言いましょうか。

島田教授

今おっしゃっていただいたような点、例えば、集団の合意形成はどのようなプロセスでつくっていくのかとか、反論するとはそもそもどういうことか、どのような条件が整ったらそれは反論していると言えるのかなど、その辺りのトレーニングは、やはり従来の国語教育の中ではほとんど顧みられていないところだったかと

思います。そういうところにも光を当てると言いますか、大切なことだと認識して、これからそれを変えていこうとしているところです。ただ、あまりそのような指導の経験のある先生方は多くない中で、どうしたらうまく進めていくのかというのが、今後の課題かなと思います。

司会（安藤）

そういう意味では、国際共修の場というんですか、留学生と色々な文化の違いを持った集まりの中でそういった経験を積むというのは非常に大事だと思います。先ほど留学の話もございましたけれども、嶋内先生にすこしお聞きしたいんですが、これまでのご経験の中で能力伸張に結びつく試みとか、あるいはいわゆるデジタルネイティブというか、自分の考え方を出していく場というのが、昔とどんどん違ってきているなかで、小さなコミュニティで議論をしているところから、もっと広いところ、いわゆる自分たちのコミュニティの外に発信する力っていうのが、今後育成することも大事かと思います。そういった点について何かお考えとか、こういう事例とかございましたら、ちょっとご紹介いただければと思います。

嶋内助手

ありがとうございます。やはり日本人の学生は、それまでの教育の経験だと思うんですけれどもやはり和の文化を大事にするというか、ハーモニーを大事にするというか。もっと言えば、空気を読むというすごく高い能力がありまして。あまりやっぱ、誰かの意見に真正面に向かって異を唱えるということはしないですね。だからディスカッションを行うというのも、恐らく日本人同士で日本語で行っていたらかなり難しいんじゃないかなというふうに思います。

ただやはりこれは先ほども講演の中でちょっとお話ししましたが、英語がひとつのブレイクスルーを作っているかなというのはあります。

英語という言語を使うことによって、英語がよいふうに働いて、ジェンダーだったり、学年差であったり、そういったある意味格差のようなものをニュートラルにしてくれて、割とフェアな関係で話ができるということですね。何かひとつ、この圧倒的な意見であったりとか、ある程度みんなが、多くの人が賛同する意見が出てきた時に、それに同調するような流れがあったりもします。そこに新しく違った雰囲気を与えてくれるのが留学生の存在で、やはり私がやっているゼミの中でも、留学生の存在って非常に大きいです。

それは、英語力という意味でもそうですし、表現力という意味でもそうですし、やっぱり違った意見を出してくれる。みんなの雰囲気がひとつの方向に流れ始めても、そこで、「でもこれは違うじゃん」とか、異なった視点とか意見を出してくれる。それが終わっても、その後普通に人間関係は変わらずに話すことができるって、そのアカデミックな場所での議論と人間関係の議論っていうのは、日本人の学生は結構結び付けて考えてしまうんです。けれども、割と留学生、特に私の大学に来ているのは欧州からの留学生が多いんですが、そうすると、割とそこをきっちり分けて、言うことは言うけれども、それとプライベートは関係がないという形で、結構辛辣な意見なんかも言ってくれる。そういう意味でやはり英語で行うことによって、留学生も入ることができる。

留学生が入ることによって、日本で育った学生も新しい経験ができて、色んな新しい視点を得ることができるという意味で、英語とそれから留学生というのは、日本の高等教育にとってもとても大きな存在なのかなというふうに思います。

司会（安藤）

ありがとうございます。英語というのが、ある意味ではその新しい世代の教育にとってもブレイクスルーになるという考え方だと思います。ここでちょっと会場の皆さんから、あとは

他の講師の先生方も含めてですけれども、今、課題として設定させていただいている、いわゆる危機の認識から、一番重要な点は何かということ、それから色んなデジタルなツールが色々と広まっている中で、こういう形で活用していくのが、新しい方針としてはいいのはいかとか、そういった提案でも結構ですので、何かご意見等ございましたらご発言くださいませ。挙手いただければと思います。

フロア

すみません、主催者が独占するというひどいパターンなんですが、東北大学のヨネザワでございます。伺いたかったのは多言語というか、要するに言語が異なる、母語が異なる人たちとのコミュニケーションの量っていうのが、やっぱりそのメディアの発展、特にデジタルネイティブの世代っていうのは、我々よりもはるかにたくさんあるし、それに始めから慣れているという環境があるというのが、良い面でも悪い面でもあるんじゃないかと考えています。

私が伺いたいのは、その中で日本語での考えをまとめたり、発展させたりということが、これからどれくらい将来性があるっていうのを、正直に言えばかなり真剣に考えなければいけないかなというふうに考えております。これは理系の方々が我々の大学はたまたま多いからかもしれないかもしれませんが、やっぱりもう学術言語が事実上英語になり始めていて、やっぱりそのすごい時間をかけて、15分のプレゼンの準備をして、とにかくやろうとするところまで来てしまっている。文系でも社会科学でかなりそうなっている中で、多分その日本語でどうやって考えるかという考え方とか、ロジックの立て方自体を多分そこで相当に影響を受けて、日本語の教育というのが行われている現実があるのかなというふうには感じているんですね。これをそのポジティブに生かすことができるのか。

つまり酒井先生の話で一番何と言うかエンカレッジだったのは、人間はいくつかの言語を複

数操ることはできるということは、かなり非常にエンカレッジなメッセージだと思ったんですけれども、そういうような複数の言語が扱えるという環境が当然となった中で、じゃあ日本語というのをどういうふうに大学の中で扱っていったらいい、それは意味があるんだと。やっぱり日本語で教えたり、日本語を学んだりということは、意味があるんだということを言い切っていけることができるのかということが、伺いたいところでございます。酒井先生の方から、簡単に結構ですのでお願いします。

酒井教授発言

司会（安藤）

ありがとうございます。それでは、続きまして。

フロア

すみません、主催者側からの質問です。今、危機的状況かということについて、明確にそうじゃないと言っている大学の先生がいらっしゃいます。朝日新聞の9月の記事に出ているんですが、酒井先生と同じ東京大学の先生で、ハシモトヨシアキ先生と読むんでしょうか。コミュニケーション論ということなんですが、この方が若者の文字消費量は、このまさにデジタルですね。文字消費量は有史以来最高のレベルと指摘して、コミュニケーション能力が飛躍的に高まったとも言えると、非常にポジティブな、そういうコメントが出ています。

ただご紹介しましたけれども、私は全く反対の立場で、そのデジタルのコミュニケーションの状況っていうのは、デジタルは手段なので、日本の若者、あるいは若者だけでなく日本人全体に共通して言える問題点、コミュ力の問題点として、これまで講師の先生方から出てきましたけれども、同調性過剰。それがそのLINEとかでさらに端的に、いじめにもつながりかねないですね。要するに、浮かないって

うことが大事ということです。根本的に教員がトレーニングの意図を持って、若者は自分たち若者同士の関係の方が大事ですので、前の大学でディスカッションをしている時に、「先生この授業では真面目な議論をしてもいいんですね」って言われて、びっくりしたことがあります。

それから、現在の勤務している東北大学でも、真剣に考えてそれをロジカルに意見を言うことは、非常に危険であるとまで、そういう趣旨のことを書いてくれていまして、要するに学生同士の間で、そういう空気があるということです。これを踏まえないと、いくらロジカルシンキングとか、クリティカルシンキングとか言ったって、通じないんですね。現状、若者がそういう状況に置かれている。ただしその裏返し、なぜそうなっているかと言うと、日本社会全体、特に、企業社会においても付度で役所であれ企業であれやっていて、本当に自分の意見を突き詰めて考えるっていうふうなことは、評価されていない面が非常に強いということがもう一点。

もう一点はこのデジタルの問題として、嶋内先生がご指摘のように非常に長いものはないですね。短いということですね。それでここでひとつご紹介したいのが、フィンランドです。一時、世界の学力調査で有名になったことをご記憶だと思うんですが、フィンランドの高校では7週間で1教科当たり200ページの教科書を読まなければならないというんですね。私は常々思うんですけれども、ライティングの指導が効果を上げる生徒、学生っていうのは、やはりベースにいい文章をたくさん読んでいないと、なかなか効果を上げられないということはあると思うんです。ところが今の日本社会っていうのは、企業の就活も含めて、そういうちゃんとしたロジックをちゃんと読んで、それで考えて述べるということが、必ずしも評価される社会になっていない。それは、子どもたちの世界にもちゃんとそれが鏡のように映っていると

思います。

さらに悪いことには、島田先生を前にして申し上げるのもあれなんですけど、初等、中等の教育の国語ってというのは、指導要領自体はだいぶ前から変わっていると思うんですが、気持ち、情緒過剰の国語指導が相変わらず現実には幅を利かせていて、それで特に小学校では学級集団作りですね。これ至上主義なので、個人の自由とかそれよりも仲間、これが第一なので、これが逆にいじめにもつながっているんですけども、こういう状況を踏まえた上で、じゃあどういうトレーニングをするかっていうと、たくさん読ませるってということと、人工的にロジカルにクリティカルに考えさせ、表明させる機会を人工的にどんどん作らないと難しいと思います。以上です。

司会（斎藤）

いっぱいありましたけれども、単純化しましょう。まずひとつは、先ほど紹介があった少なくとも文字情報との接触という点では劇的に増えていて、それに伴ってどういう意味でのコミュニケーション能力か分からないけれども、コミュニケーション能力は高まっているという現状認識について、一言ずつ、その論評のどこが違うのかということをもまずは言っていただけますか。酒井先生からお願いします。

酒井教授発言

司会（斎藤）

一言、ナンセンスだという話ですけども、それ以外で別の視点からこういう問題点があるよってことを、一言ずつ、もしあればお願いします。

嶋内助手

私は酒井先生がおっしゃったことに100%賛同します。

司会（斎藤）

じゃあパス。

島田教授

私もパスでいいんですけども、それはどのような場面におけるコミュニケーションについてなのか、例えば、仲間うちなのか、少し改まった場面か、とても改まった場面なのか、そこは明らかでない。

司会（斎藤）

高まっているとは思えない感じがするということですね。どうでしょう、最後は、佐渡島先生お願いします。

佐渡島教授

情報のレベル、情報というか、思考のレベルだと思うんですね。情報に取り込まれてしまって、振り回されてしまっているというのは、もうそのレベルですけども、それをどう解釈するか、どう批判するか、どう評価するか、どう自分に取り込んでいくかっていうことだと思うんですね。

私は今まで、私の生涯の中で一番考えさせられた授業ですが、アメリカで哲学の授業があったんです。その哲学の授業は15週間で、本を15冊読むんですね。1週間の間に哲学書を半分読むんです、200ページです。そしてその200ページについて、2枚書くんですね。それを1週間の間にしなきゃいけないくて、すごく大変だったんですけども、その時に哲学書を200ページ読むと理論が書いてありますよね。そうするとペーパーには、じゃあそれは、その理論に当てはまることが実社会で起きている。こういう事例がそれを証明しているっていうふうに、理論を実際に下ろす。そういう作業をしなければいけなかったんです。今週はこういう理論か、これは社会の中であるかな、ないかな。日本ではどうかな、アメリカではどうかなと、すごく考えているうちに、私は頭が痛くなったんです。

ね。脳科学の先生の前でこんな話をするのは恥ずかしいんですけども、脳みそがかき混ぜられて、頭が痛くなるような感じなんです。すごく考えると、人間って頭が痛くなるんだなって、その時に思ったんですね。

今日、本当に後で酒井先生に伺いたいと思うんですけども、本当にクリエイティブに何か生み出す時の脳って、どこをどういうふうに使っているのかなって思うんですけども。こういう応用問題ですね。それを学生さんに課して、頭が痛くなるほど考えさせる。そういうことはできないものかなって思っています。

司会（斎藤）

はい、ありがとうございます。ふたつ目。こっちの方がより本質的な話だったのですけれども、そうは言っても結局今日いっぱい出てきたようなロジカル、クリティカル、それから明晰な云々といったって、結局はそんなのは日常生活に役に立たないという問題。あるいは日本で我々が普通に生きていく分には、何のどういう意味があるのかよく分からない。結局それは、高等教育機関という、非常に文化的に純化された仕組みの中で通じる話なのであって、日常生活とどう関係するのかという問題です。つまり、なぜこういうことを訓練しなきゃいけないのか、なぜそういう訓練に耐えてそういう能力を付けなきゃいけないのかという点、その点をどういうふうに説明すればいいんでしょう。酒井先生お願いします。

酒井教授発言

司会（斎藤）

一言で言えば、「楽しいよ」っていうことですね。

酒井教授発言

司会（斎藤）

一言ずつ、同じ質問ですけども、嶋内先生は何でこんなことをやるんですかって言ったら、どう答えるんですか。

嶋内助手

一言で言うと、論理的な説明はないと思います。というのは、例えばなぜ英語をやる必要があるんですかと言った時に、正直日本に暮らしていたら英語をやる必要はそれほどないです。実際問題としてはないです。じゃあ批判的能力は必要で、論理的思考が必要です、メディアリテラシーが必要ですというふうに言ったとしても、先ほど大森先生がおっしゃったように、企業に入ればもう付度に次ぐ付度の世界で、同調性過剰の社会です。そこでじゃあ批判的能力が必要かっていったら、ただ個人が生きていくためには必要がないですよ。だからそういう意味では、そういう説得は多分できないと思うんですね。

だけれども、じゃあ日本がこれから、何て言うか、日本はもう沸騰しきった味噌汁みたいな状況で、もう多分ピークは過ぎていて。でもただ味噌汁としてこのアイデンティティを守っていかなきゃいけないので、どういうふうにじゃあ、これからこの中で発展していくかということ考えた時に、今までみたいな日本の姿ではもう当然なくなっていくので、これからどんどん移民を受け入れて、どんどん国際化していったって発展していくという方法しかもうないと思うんですね。その中で、今みたいなそのいわゆるハイコンテキストと呼ばれているようなコミュニケーションのあり方って、もう通用しなくなっていて。そもそも、日本社会がハイコンテキストというのも非常に非科学的な話で、全然信じていないんですけども、同じような言語を話して、同じような価値観を持つ人たちがいたからこそ、通じるコミュニケーションというのが、もうすでに崩壊しかけていると思うので。

やはり、これから来るべき社会っていうのはもうどんどん変わっていくことと、色んな人が入ってくるというのを前提にした上で、それに対する対応能力として、やはり個人がどういうふうに生きるかの問題ではなくて、社会としてどうするかというレベルで考えて行くと、やはりそれこそ英語能力であったり、先ほど言ったような色々な能力が必要とされていくのかなという説明はできるのかなと思います。

司会（斎藤）

一言ずつ、同じ質問ですけども、嶋内先生は「何でこんなことをやるんですか」って言ったら、どう答えるんですか。

島田教授

ロジカルに、それからクリティカルに考えるということが、大学生にどのように役に立つか、無理にひとことで言うならば、それはより良く生きるため、と私は答えます。それは大学を卒業してからもずっと同じであって、例えば次のセミナーのテーマを何にしようとか、社員旅行どこに行こうかというような合意形成も、やっぱりどうやったら円滑にできるかということはいろいろな場面で必要になってくるだろうし、またお互いに反論はするけれども仲はいいといった関係をずっと続けていくためにはどうしたらいいんだろうとかですね、それは嶋内先生が指摘のように、多様性への対応ということにもなりそうですけれども、そういうことも含めてより良く生きるために必要だ、と私は信じたい。そこはまだ諦めたくないと思っています。

司会（安藤）

はい、ありがとうございます。それでは最後に佐渡島先生の方から。

佐渡島教授

はい。大学っていうところは、高校とは違う

ところだと思います。それから職場とも違うところだと思うんですね。私は自分の目標として、大学4年生、卒業式の頃に研究って楽しいって、卒業論文をゼミで書かせて研究って楽しいって思わせれば、自分の目標はひとつ達成できたのかなというふうに、自分で思うようにしています。世の中のどんなことでも研究になるんですねって言って卒業していった女の子がいたんですけども、まだ分からないことっていっぱいあるんですねって。それが分かって卒業してくればいいなって思うんですね。そのためには、今情報を取り込むことは簡単にできる社会なので、大学や大学院で、方法論をうんと勉強させることじゃないかなと思っています。

司会（安藤）

ありがとうございます。最後に、本当に素晴らしい言葉をいただきました。大学の中の教育のアウトカムというのはどういうことか。いわゆる学生にとっての満足度に関連して、新しいことを知るということや、それがどれだけ楽しいことかということを知らしめるということが非常に大事だという言葉いただきました。ありがとうございます。ちょうど時間がそろそろ過ぎて参りまして、このまま議論がまとまるかなと思っていたところに、最後にありがたい言葉をいただきまして、ありがとうございました。

それでは色々ともた質問の手があがっていましたが、大変申し訳ないですけども時間になりましたので、これで本日の討議の方を終わらせていただきたいと思います。この後、懇親会もごきますので、その時にまた各先生方に色々質問等いただければと思います。それでは、以上で本日の討議を終わらせていただきます。4人の先生方、大変ありがとうございました。（拍手）

*ご本人の申し出により、酒井教授の発言内容は割愛しています。

閉 講 式

閉講挨拶

東北大学理事／高度教養教育・学生支援機構長

花輪 公雄 教授

ご紹介ありがとうございます。東北大学の花輪でございます。閉講式ということで、一言ごあいさつ申し上げます。「大学生と言語－変容する思索と文化の礎－」という表題で、今日半日、4名の講師の先生方の話題提供、その後パネルディスカッションと、非常に長い時間でしたけれどもありがとうございます。特に4名の先生方、それぞれの切り口で現在の言語状況、特に大学生と絡めてお話ししていただけたと思います。



4名の先生方のご講演、ほとんどそうだとはいふうに思っています。私も6年前まで研究室で学生指導をやっていたんですが、本当に本は読まない、新聞は取っていないというような状況で、そしてどんどん年を経るごとに、書けなくなっているんですね。修士論文、博士論文がどんどん薄くなる。それは内容に限らずなんですけれども、そういうことを目の当たりにしていました。何とかしなければいけないなというふうに色々考えていました。

特にパネルディスカッションでの大きな話題、危機的かどうかですが、恐らく皆さん全員そうだと思われていると思うんですが、その「危機的」には価値観もあると思うんです。これじゃいけないって皆さん思ったはずなんです。危機的、いいよう、日本はそんな人たちでゆくゆく行くんだから何でもいいよじゃなくて、日本はこれからも山椒は小粒でもぴりりと辛い国、世界から尊敬される国になってほしい、そういう時に、未来を託す今の学生でいいのというのががあるから、皆さん危機的という言葉で表現したんだろうと思います。

じゃあ、それを打破するのは何だろう、どうやって打破するの、ここは色々な考えがあったと思います。島田先生からは学習指導要領がどんどん変わって、考えるようなところに力点を置いていくようなことになりますよというのがありますし、佐渡島先生からは、大学は大学なりの、思考のやり方があって、ライティングのところでこんな指導をしていくんだというのがあったと思います。

私は、今の流れもそうなんですけれども、やはり大学の国際化という、もう言い古されましたが、文科省の右往左往の施策に大学もある程度乗って行かなくてはならないような状況もあります。胸を張ってでもないんですけども、でもやはり、言葉が違う人たちを大学に入れて、それからそういう人たちと一緒に日本人を教育していく。そういう中で、光明が、光が見えてくるんじゃないかなという気がします。

もちろん今の学生はデジタルネイティブということですが、情報に接するときの我々は、リテラ

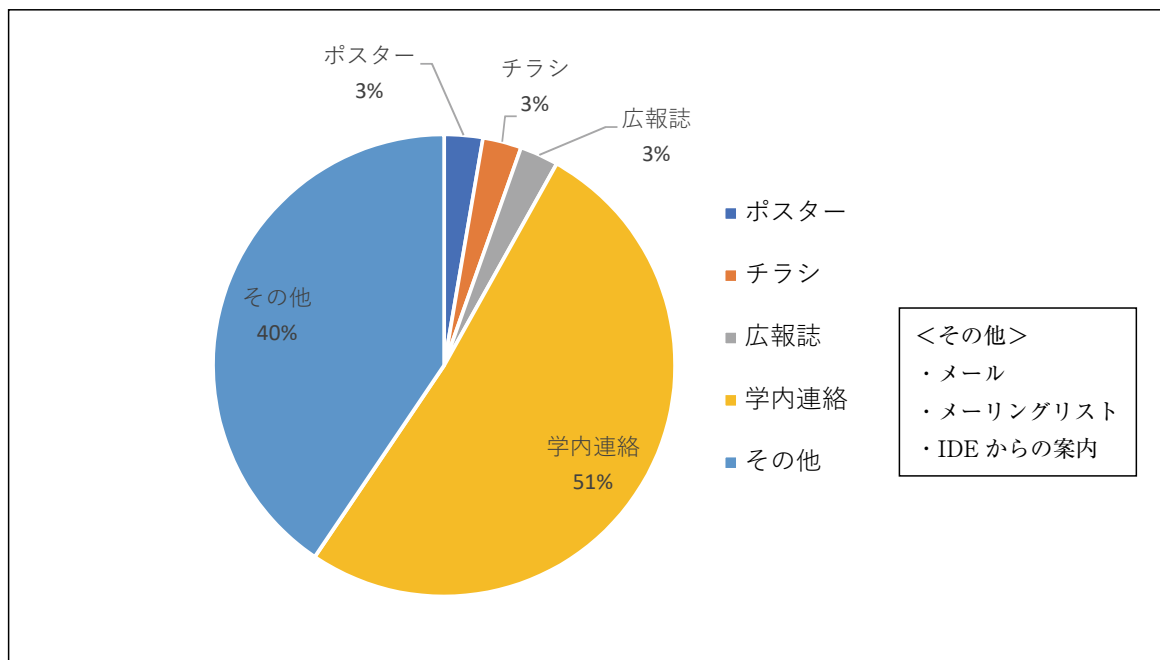
シーが全く足りないと思います。そこの部分の教育もあるんですけども、大局的に見れば、違う言葉を話す、違う文化を経てきた人たちとの一緒に教育の中から、何か光があるのではないかな、というふうに私個人では感じました。そういう意味で、非常に密度の濃い、今日はセミナーになったと私は思います。特に講師の皆さん、それから参加された皆さんに感謝を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。以上、私のあいさつにさせていただきます。

アンケート・参加者統計

平成29年度 IDE 大学セミナーアンケートより

(会場来場者数 84名, 内アンケート回収 36名)

Q1 このセミナーのことは、どこでお知りになりましたか

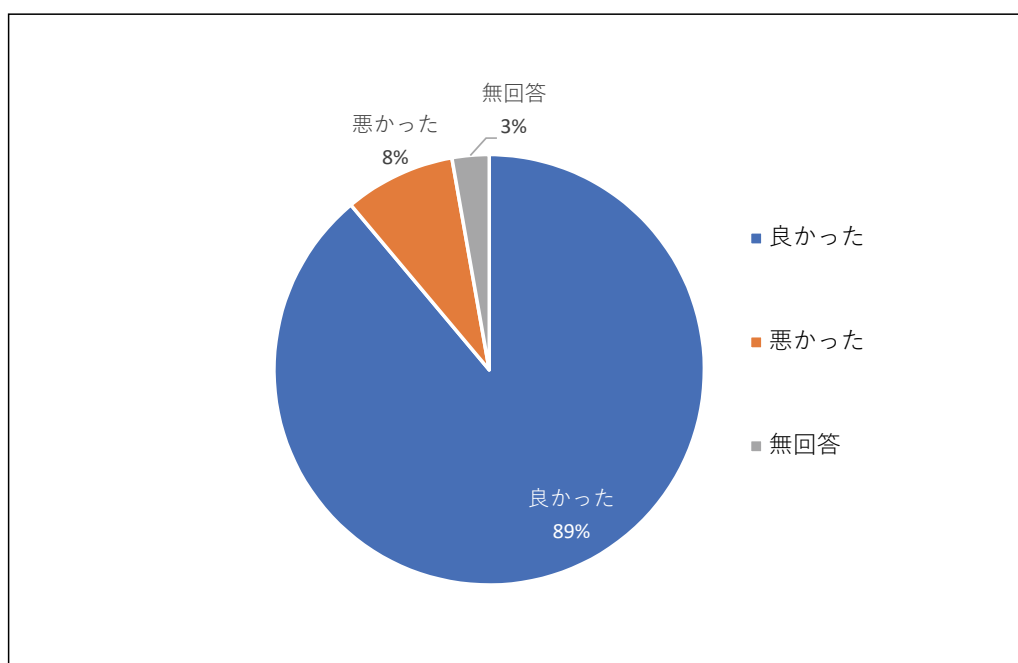


Q2 このセミナーに参加された動機は何ですか

- ・テーマに関心あり
- ・テーマに興味を持ったため
- ・「書くこと」の教育に興味があります
- ・様々な領域からの知見を得たかったため
- ・テーマに興味があった
- ・国語教育、アカデミック・ライティング指導についての研究成果にふれるため。
- ・講演内容に興味があったから。
- ・上司のすすめ
- ・ライティング指導に関心があるから
- ・テーマに関心があった。
- ・ライティング支援に携わっているため。
- ・学習支援に関わっているので、テーマに興味があった。
- ・教えている学生の文章力がなさすぎてどうしたら良いのかの策を聞いたかった。
- ・毎回勉強になる内容である。
- ・大学教育に携わる者として、様々な知識を身に付けたいので参加した。
- ・言語・大学生というキーワードに興味を持ったため。
- ・テーマに対する関心
- ・教員1年目です。学生の言葉の力にショックを受けたため。

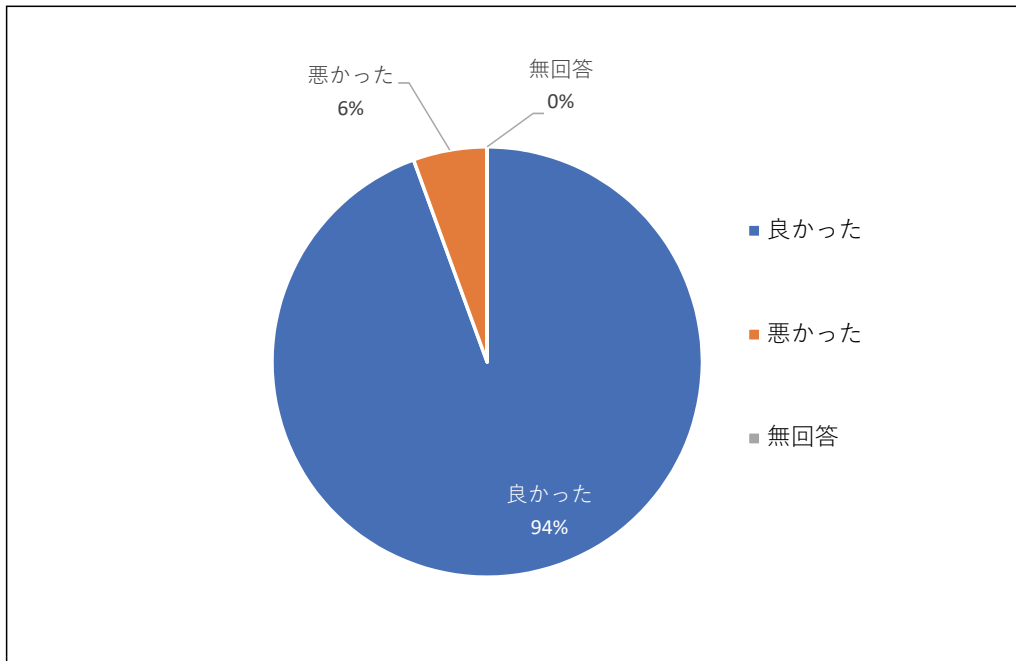
- ・日本人，外国人の共用できる勉強の環境や方法の理解を深めたい。
- ・学生の理解
- ・新知見を得るため
- ・勤務先（法科大学院）
- ・国語教育，ライティング指導への関心。
- ・言葉にかかわるものだったから。
- ・ライティングの指導で困っている。
- ・テーマについて興味・関心があったため。
- ・大学の国際化・英語化の方法を考えるため。
- ・医療通訳のボランティアで，酒井先生の本を愛読しているので。
- ・科学英語という授業を全学教育として実施していて，言語教育に興味があったため。
- ・入試に関することと，アカデミック・ライティングの方法について

Q3 開催日時について



- ・数年ぶりで出席できました。平日以外，日曜日なら出席可能です。
- ・土・日
- ・悪かったわけではないが，例年の月曜開催のほうが参加しやすい。（週の中頃は職員参加が厳しい）
- ・自分が翌日に授業のない日（木か金）

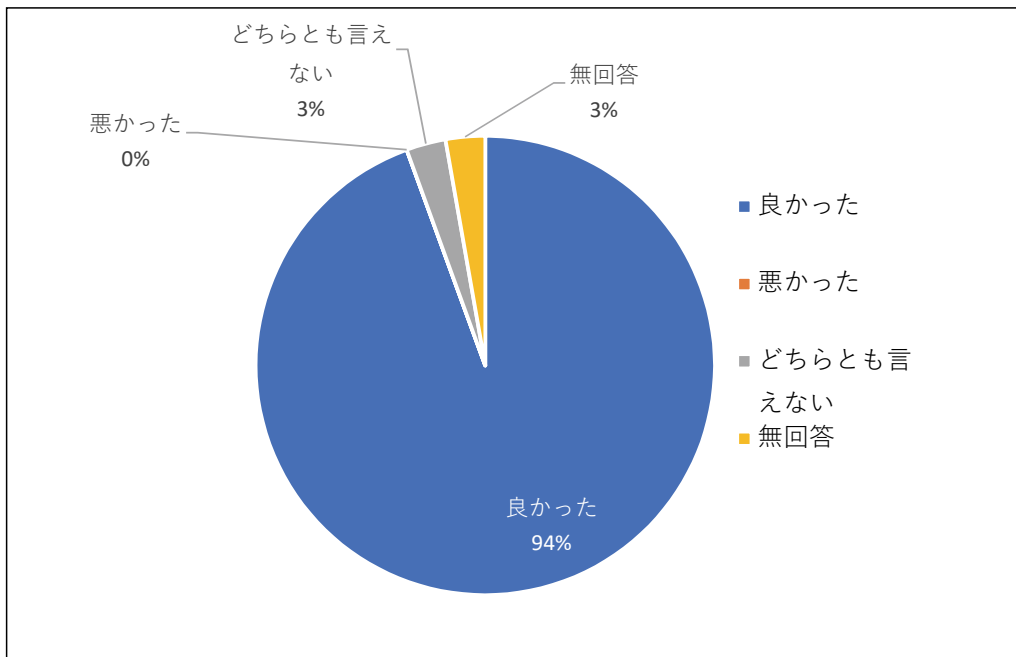
Q4 会場について



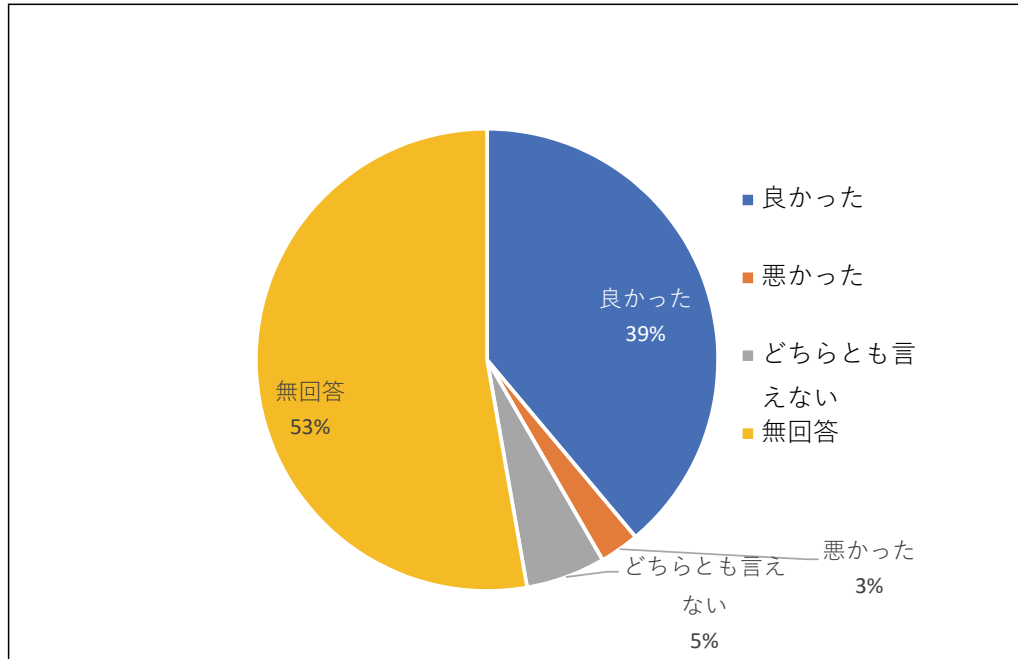
- ・ 東北大学
- ・ 背景を理解していませんが，例えば東北大学内等では開催が難しいのでしょうか？

Q5 内容について

1) 講演



2) 討議



Q6 内容について、ご感想をお聞かせください。

- ・ 学生教育に役立つ内容だと感じました。
- ・ 日常業務とは異なる分野のお話でしたが、学生の指導に通じるものがありとてもスッキリした感じがしました。
- ・ バランスのとれた構成で、それぞれ第一線で活躍されている方々で、非常に有益であった。
- ・ 話が聞きとれない講師がいた（早すぎる。発音が不明確）
- ・ 酒井先生の講演だけで、2万円払って聴く価値のある研修でした。
- ・ 充実していました。参加して満足しております。
- ・ テーマ及び各講演者の発表内容がとてもわかりやすく非常によいセミナーだったと思います。
- ・ 興味深い話がたくさん聞けて有意義だった。
- ・ 言語について様々な観点でのお話がうかがえ、興味深かった。
- ・ 多角的な視点から大学生の言語について考える機会になった。
- ・ 様々な立場からの考えを聞くことができた。それを踏まえてどう考えられるのか大きな宿題を頂いた。
- ・ 現状は実感として理解してるので、今後どうしたら良いのかということを知りたい。佐渡島先生のお話は大変役に立ちました。
- ・ 講演者は非常に充実していた。進行（司会者）もよかったが、個々の質問者の発言が長すぎる。
- ・ 言語教育について、様々な研究者の考えや、現在の教育現場で行われていることについて知ることができ、とても有意義でした。
- ・ 今後も大学教育に関するセミナーに参加し、知見を得たいと思います。今後ともご企画に期待しています。
- ・ 佐渡島先生の講演がとても参考になりました。
- ・ 脳科学からの知見にはじまり、英語、国語、ライティングと幅広い視点から興味深い話をうか

がうことができた。

- ・ Today is a great opportunity to hear invaluable experience from all speakers. All of them are nice and lovely.
- ・ 貴重なお話の数々、大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・ 良く準備されたレベルの高い内容だったと感じました。
- ・ 酒井先生と佐渡島先生の講演が非常に良かった。討議は司会が4人の登壇者の問題意識の「違い」を無視しすぎではないか。ちゃんと議論を促進する指導の悪い例。反面教師として参考になった。
- ・ 言語、国際、国語、ライティング、いずれも関心領域であり満足しました。
- ・ 質問者がくどい。他の質問者がいるのに主催者にあててはダメです。
- ・ 基調講演は内容が良いだけにもう少し深く知りたかったです。→長い時間があっても良かったのでは。
- ・ 文系と理系、文章の構成の違いまでお話を伺いたかった。
- ・ とても勉強になりました。知識面と視点という面でプラスの収穫がありました。各講演のテーマの組み合わせもバランスがとれていて非常に良かったと思います。
- ・ アカデミックということで、レベルの高い学生を対象とする論点だったように思われた。マスの部分にも目を向けてほしい。

Q7 IDE 大学セミナーで扱ってほしいテーマがありましたらお書きください。

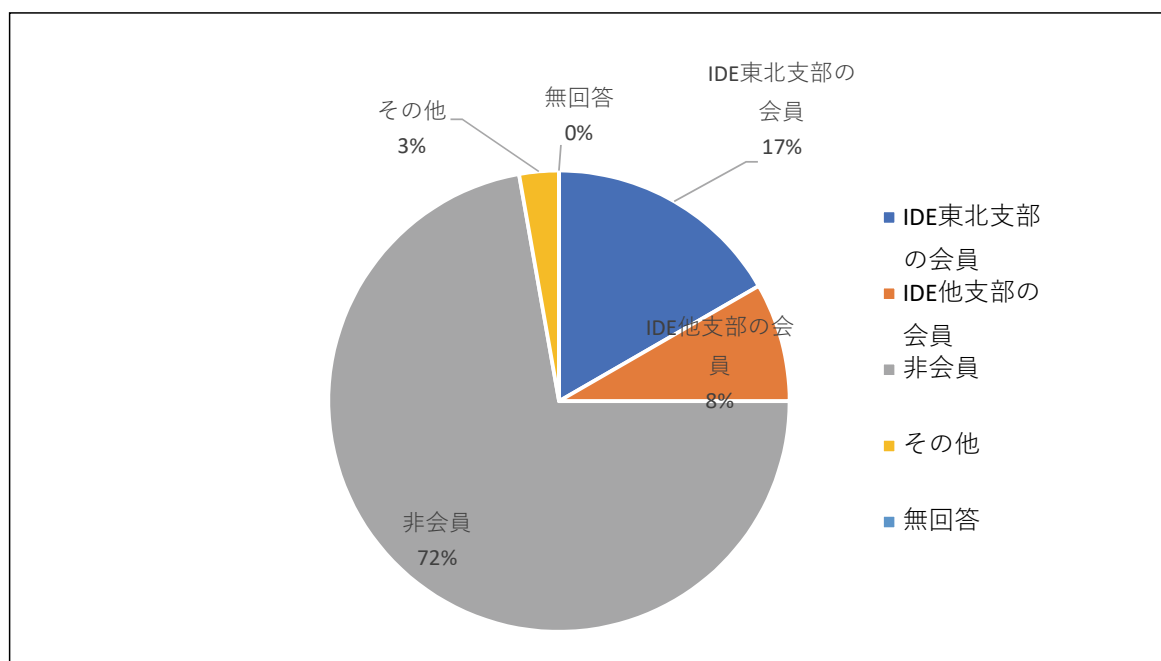
- ・ 文理融合、教養教育の意義、高大接続、LGBT 問題、留学に係る諸問題、大学生と地域の諸問題、学力とは？
- ・ 大学マネジメント、教職員の協働について。
- ・ ゼミにおける討論の仕方についての指導法
- ・ 学生の確保、留学生の確保と指導。
- ・ クリティカルシンキング等論理的思考に関するテーマ
- ・ 学生のクラス内 or 授業の学力差への対応
- ・ IR、質保証
- ・ 課題の抽出や整理も大切だが、そこからどう行動していくか、ということを重視してもらいたい。
- ・ 内部質保証に関するケーススタディ、好事例。
- ・ 日本語だけにまとをしぼって開催してほしい。
- ・ 日 EU・EPA によって2018年、ヨーロッパ基準に対応できるのか？医薬品、EU から日本での企業もあって影響に対応をどうするか？
- ・ クリティカル・シンキングについて
- ・ 日本語表現等、今回の発展的な課題を取り上げていただきたい。

Q8 その他運営等で何かございましたらお書きください。

- ・ 2日間でゆったり、じっくり開催されていた過去のあり方も再現していただきたい。
- ・ 特にありませんが、とても興味深いテーマで大変勉強になりました。運営大変だったと思います。ありがとうございました。

- ・司会者が細かく変わるのが不思議に思った。
- ・質疑や討論の時間を確保するスケジュールを考えてもらえたらありがたいです。講演は延びるものだから、それを折り込んでおかれると良いと思います。総合討論は演者はもうしゃべらなくていいのでは。フロアからの意見に対してコメントされるのがよいと思います。
- ・討論をフロアに振ったのなら、フロアで挙手した人から拾うべきなのかと思います。主催者側のコメントが長すぎる。
- ・おもしろい企画でした。トロント大学などの脳をもとに指導など事前に IDE セミナーで学んでいたから、より深まり良かった。
- ・最後の質疑でフロアの発言に対して、司会の方の対応が悪い。話を中断するにもやわらかな技術力がないと大人として不適切である。
- ・司会の先生が討議に方向性を持たせようとして努力しておられるのがよかった。単なるフリーディスカッションでなく。
- ・配布資料にメモ欄もあり、良く考えられていると思った。

Q9 最後に回答者様について教えてください。



参加者統計

参加者総数：84名

内 訳：講師 4名

参加者 65名

実行委員 15名

IDE 大学セミナー実行委員

委員長	東北大学	高度教養教育・学生支援機構長	花輪 公雄
委員	岩手県立大学	教育支援本部長 社会福祉学部教授	高橋 聡
	宮城大学	事業構想学部教授	蒔苗 耕司
	石巻専修大学	人間学部教授	山崎 省一
	仙台白百合女子大学	人間学部長	槇石多希子
	東北学院大学	学長特別補佐	齋藤 誠
	東北大学	教育学研究科教授	宮腰 英一
	東北大学	IR 室教授	米澤 彰純
	東北大学	高度教養教育・学生支援機構副機構長	安藤 晃
	東北大学	高度教養教育・学生支援機構教授	羽田 貴史
	東北大学	高度教養教育・学生支援機構教授	石井 光夫
	東北大学	高度教養教育・学生支援機構特任教授	関内 隆
	東北大学	高度教養教育・学生支援機構教授	杉本 和弘
	東北大学	高度教養教育・学生支援機構教授	大森不二雄
	東北大学	高度教養教育・学生支援機構准教授	串本 剛
	東北大学	高度教養教育・学生支援機構准教授	猪股 歳之

(敬称略)

報告書編集：串本 剛，鎌田 裕子（東北大学高度教養教育・学生支援機構事務室）

IEHE Report 75*

平成29年度 IDE 東北支部 IDE 大学セミナー／
第27回東北大学高等教育フォーラム 報告書

平成29年度 IDE 大学セミナー
大学生と言語－変容する思索と文化の礎－

2018年（平成30年）3月 発行

I D E 大 学 協 会 東 北 支 部
東北大学高度教養教育・学生支援機構

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/>

*No.55以前は CAHE TOHOKU Report として刊行